育児とICT―乳幼児のスマホ依存、育児中のデジタル機器利用、育児ストレス
The Role and Problem of ICT in Parenting

橋元良明　HASHIMOTO, Yoshiaki　久保隅綾　KUBOSUMI, Aya
大野志郎　OHNO, Shiroh

目次

０．調査の概要　橋元良明
0.1 調査の目的
0.2 調査方法
１．乳幼児(第一子)に利用させている情報機器、アプリ、コンテンツ　橋元良明
1.1　乳幼児の利用機器
1.2　親の世帯年収別／母親の職業／母親の学歴別乳幼児の機器利用の状況
1.3　乳幼児のアプリ、コンテンツ利用
２．乳幼児の情報機器やネット利用に関する懸念、期待、利用後の変化　橋元良明
2.1　乳幼児の情報機器やネット利用に関する懸念
2.2　乳幼児の情報機器やネット利用に関する期待
2.3　乳幼児のスマートフォン利用後の変化
３．乳幼児のスマホ依存　橋元良明
3.1　乳幼児のスマホ依存傾向者率
3.2　乳幼児のスマホ依存傾向と母親の依存傾向の相関
3.3　乳幼児のスマホ依存傾向と年収・母親の職業・学歴
４．育児とスマートフォン、タブレット端末利用　久保隅綾
4.1 子どもと一緒に過ごす場面での母親のスマートフォンおよびタブレット端末利用（Q17）　全体／子どもの年齢別／職業別／世帯年収別／学歴別分析結果
4.2 母親によるスマホ育児の実態（Q18）　－全体／子どもの年齢別／職業別／世帯年収別／学歴別分析結果
4.3 育児ストレスとスマホ育児
4.4 母親の情報機器画面閲覧による干渉･妨害（Parent Screen Distraction: PSD）
4.4.1 情報機器画面閲覧による干渉・妨害の実態（Q19）―全体／子どもの年齢別／職業別／世帯年収別／学歴別分析結果
4.4.2 日常生活場面における母親の PSD 状況認識（Q20）　－全体／子どもの年齢別／職業別／世帯年収別／学歴別分析結果

4.5 子どもと一緒に過ごしている時間における母親自身の情報機器やソーシャルメディア利用への態度・考え（Q22）
5．育児ストレスとICT利用　大野志郎
5.1 育児ストレスと母親の生活状況
5.2 育児ストレスと母親・子供のICT利用
5.3 育児ストレスと情報端末利用により生じる問題
5.4 本章のまとめ
単純集計

橋元良明　東京大学大学院情報学環
久保隅綾　慶應義塾大学SFC研究所上席所員
大野志郎　東京大学大学院情報学環

本報告のベースとなる調査は、株式会社KDDI総合研究所と東京大学大学院情報学環橋元研究室の共同研究の一環として実施されたものであり、本報告は当該共同研究の成果の一部である。

0.1　調査の目的

我々は 2017 年 9 月に乳幼児における情報機器利用や利用するネット・アプリの実態、両親の家事育児分担等を分析するために家庭訪問調査と父母対象の質問票調査を実施し、その結果を下記の文献で紹介した。

橋元良明・大野志郎・久保隅綾(2018)「乳幼児期における情報機器利用の実態」、『東京大学大学院情報学環　情報学研究　調査研究編』No.34, pp.213-244.

久保隅綾・橋元良明・大野志郎(2018)「乳幼児を持つ共働き夫婦の仕事と家庭の両立と情報機器利用実態」、『東京大学大学院情報学環　情報学研究　調査研究編』No.34, pp.245-284.

スマートフォンの利用率自体は若年層においてほぼ飽和状態に達しているとは言え、乳児用のコンテンツや育児アプリがさらに充実することにより、育児とスマートフォンとの関わりは益々密接になりつつある。乳幼児がスマートフォン等のデジタル機器に接触する場面も増加し、育児にも各種 ICT を活用する機会が増えることにより、育児そのものの形態に変化が生じてきた。その一方で、乳児期からデジタル機器に接触することへの親の懸念も益々膨らんできている。

そのような状況で我々は、次のことを明らかにすることを目的として、乳幼児をもつ母親に対して調査を実施した。本稿はその結果の一部を報告するものである。

(1)乳幼児に触れさせている情報機器、ネットサイトやアプリの実態
(2)乳幼児における「スマホ依存傾向」
(3)育児における ICT 利用の活用と課題
(4)母親における育児ストレスの現実と ICT との関係

0.2 調査方法

(1)調査対象者：株式会社マクロミルの関東地方（一都六県）のモニター[1] のうち、0 歳から 6 歳の第一子と同居している、18 歳から 49 歳までの女性[2]。
(2)調査方法：オンラインアンケート調査。はじめに事前調査を実施して対象者を抽出し、本調査の対象とした。
(3)有効回答数：2,272 票（事前調査回収数 9,538 票[3]）
(4)調査期間:2018 年 10 月 2 日～10 月 3 日(事前調査は 2018 年 9 月 25 日～10 月 4 日に実施[4])

[1] モニター総数はおよそ 402 万人（3 社重複あり）である。
[2] 年齢は 5 歳刻み均等(5 歳まで各 324 サンプル、6 歳は小学生 164 サンプル、未就学児 164 サンプル)、性別は男女 1:1 とした。
[3] 事前調査配布数は非公開。
[4] 本調査で回収数が不足した場合に備え、事前調査は本調査終了まで継続した。

１．乳幼児（第一子）に利用させている情報機器、アプリ、コンテンツ

1.1　乳幼児の利用機器

Q2 では「あなたがお子さんに見せたり、使わせたりしている情報機器」という質問形式で 1 歳から 6 歳までの乳幼児(第一子)の情報機器利用状況を尋ねた。

表 1.1.1　乳幼児に利用させている情報機器（全体／乳幼児の性別ごと、単位：％）

	全体（N=2272）	男児(N=1136)	女児（N=1136）	χ^2値	有意水準
スマートフォン	62.0	61.0	63.0	0.99	ns
携帯電話（ガラケー）	0.9	0.6	1.2	2.36	ns
タブレット端末（iPadなど）	23.7	23.3	24.1	0.20	ns
パソコン	7.4	6.3	8.4	3.42	ns
触らせていない	27.6	29.0	26.3	1.98	ns

χ^2値は乳幼児における各機器の利用の有無と、男児／女児のクロス集計における分析結果。
ns：no significant

表 1.1.1 に見られるとおり、1～6 歳の乳幼児に利用させている情報機器として**スマートフォンが 62.0%で最も比率が高かった**。タブレット端末は 23.7%、パソコンは 7.4%である。

ちなみに昨年度の同種の調査※の結果はスマートフォンが 59.6%、タブレット端末は 19.9%、パソコンは 10.8%であり、スマートフォンが 2.4 ポイント、タブレットが 3.8 ポイント増加、パソコンは 3.4 ポイントの減少である（もちろん、標本母集団が異なるため直接比較はできない）。

一方、「（情報機器に）触らせていない」は 27.6%であった(昨年は 33.4%)。

※橋元良明・大野志郎・久保隅綾(2018)「乳幼児期における情報機器利用の実態」、『東京大学大学院情報学環　情報学研究　調査研究編』No.34, pp.213-244.

乳幼児の性別に見た場合、提示した**すべての情報機器において**、昨年調査同様、**性別による有意差は見られなかった**。男児の方が機械に興味を持つというステレオタイプも見られるが、今回の調査では、有意差はないものの、スマートフォン、タブレット、パソコンいずれについてもむしろ女児が利用している率の方が若干高かった。

次に乳幼児の年齢別に情報機器の利用状況を見たのが表 1.1.2 である。また、同じ結果を乳幼児の年齢別にグラフ化したのが図 1.1.1 である。

0 歳児では「いずれの機器にも触らせていない」が 59.6%であるが、**スマートフォンを利用させていると答えた比率が 0 歳の乳幼児において 34.9%**あったというのは極めて注目すべきことである。昨年の 23.5%より 11.4 ポイント増加している。

スマートフォン以外の機器に目を向けると、タブレット端末が 0 歳の 7.1%から 6 歳の 31.4%へ、PC が 3.7%から 13.1%へほぼ単調に増加している。一方、従来型携帯電話を利

用している乳幼児はほとんどいない。

表 1.1.2　乳幼児の年齢別情報機器の状況(単位：%)

	0歳(N=324)	1歳(N=324)	2歳(N=324)	3歳(N=324)	4歳(N=324)	5歳(N=324)	6歳(N328)
スマートフォン	34.9	63.0	68.8	68.5	67.6	65.1	66.2
携帯電話(ガラケー)	0.3	0.3	1.2	0.0	0.9	0.9	2.7
タブレット端末(iPadなど)	7.1	19.8	23.5	26.5	28.4	29.3	31.4
パソコン	3.7	5.2	5.6	6.5	8.6	8.6	13.1
触らせていない	59.6	28.4	23.5	22.2	19.8	22.2	18.0

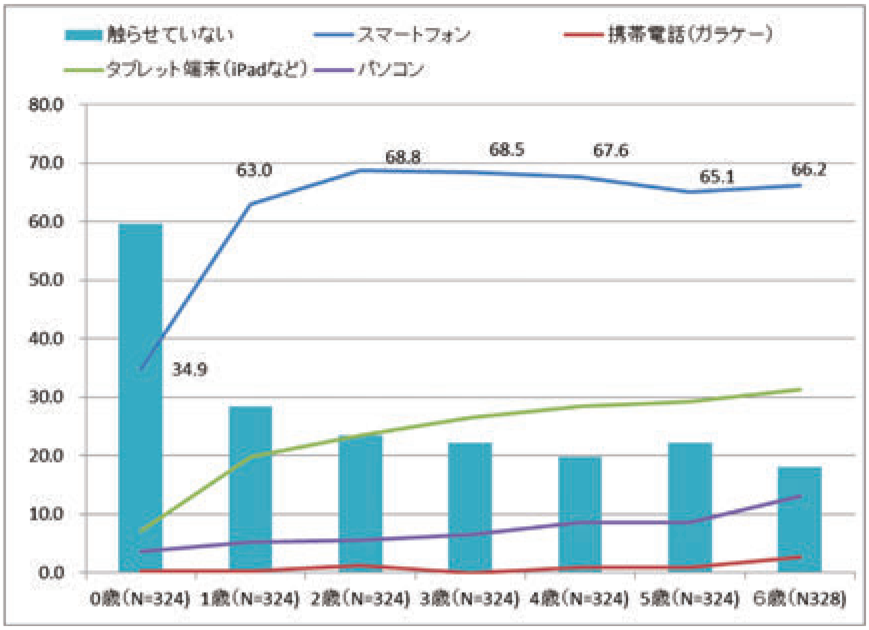

図 1.1.1　乳幼児の年齢別情報機器の状況(単位：%)

1.2　親の世帯年収別／母親の職業／母親の学歴別乳幼児の機器利用の状況

表 1.2.1　世帯年収別乳幼児の世帯年収別情報機器の状況(単位：%)

世帯年収別					
	スマートフォン	タブレット	PC	触らせていない	N
400万未満	63.8	23.0	6.2	26.2	469
400-600万未満	66.0	24.3	6.9	23.4	668
600-800万未満	65.0	22.9	7.6	24.6	406
800-1000万未満	63.3	22.5	**11.9**	28.4	218
1000万以上	48.2	30.4	6.7	**37.0**	135
χ^2値	16.00	3.81	7.89	12.08	
有意水準	**	ns	ns	*	

χ^2値は乳幼児における各機器の利用の有無と親の世帯年収のクロス集計(垂直列)における分析結果
*:p<0.05, **:p<0.01　ns：有意差なし
残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

まず、世帯年収との関係では PC、タブレットは有意な関係がなく、スマートフォンだけが有意な関係を持った(表 1.2.1)。

表に示される通り、**年収 1000 万以上の世帯の乳幼児はスマートフォンに触れている率が有意に低い。また、「どの情報機器にも触らせていない」の回答比率と年収も有意な関連があり、年収が高いほど「触らせていない」という傾向**が見られる。

次に母親の職業との関連では(表 1.2.2)、スマートフォン、タブレット、ＰＣのいずれも職業と有意な関連は見られなかった。

「情報機器に触らせていない」に関して、残差分析の結果では「パート・バイト」において「どの情報機器も触らせていない」という比率が低い。

表 1.2.2　母親の職業別乳幼児の職業別情報機器の状況(単位：%)

職業別					
	スマートフォン	タブレット	PC	触らせていない	N
フルタイム	60.5	25.7	7.5	28.0	342
パート・バイト	66.8	24.7	8.5	21.5	316
専業主婦	62.3	24.0	6.8	27.9	1402
χ^2値	3.02	0.45	1.28	5.54	
有意水準	ns	ns	ns	ns	

χ^2値は乳幼児における各機器の利用の有無と母親の職業別のクロス集計(垂直列)における分析結果
ns:有意差なし。
残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

母親の学歴と乳幼児の情報機器利用との関連では(表 1.2.3)、すべての情報機器について学歴との有意な関連は見られなかった。ちなみに昨年調査では乳幼児のスマートフォンの利用に関し、母親が大学卒以上の利用率が有意に低かったが、乳幼児のスマートフォンの利用率が全体的に高まっている状況で，母親の学歴の影響も受けにくくなったと考えられる。

表 1.2.3　母親の学歴別乳幼児の学歴別情報機器の状況(単位：%)

学歴別					
	スマートフォン	タブレット	PC	触らせていない	N
高卒以下	64.6	24.3	5.5	24.6	548
短大・高専・専門学校卒	62.0	25.0	7.2	27.3	755
大学卒以上	60.9	22.8	**8.2**	29.2	940
χ^2値	2.08	1.24	5.43	3.55	
有意水準	ns	ns	ns	ns	

χ^2値は乳幼児における各機器の利用の有無と母親の職業別のクロス集計(垂直列)における分析結果
ns:有意差なし。
残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

乳幼児のスマートフォンの利用の有無に対して、世帯年収、母親の学歴、母親の職業の 3 変数のどれが最も関連が深いかをロジスティック回帰分析した結果が表 1.2.4 である。

なお、乳幼児の年齢も大きく関連するが、それが大きな効果を持つことは自明であり、また乳幼児の年齢は世帯年収や母親の学歴とも無相関であり統制変数としても投入する意味がないため、説明変数から除外した(母親の職業としてはフルタイムと専業主婦をダミー変数として投入した)。

表 1.2.4　乳幼児のスマートフォンの利用の有無に関するロジスティック回帰分析

変数	回帰係数	Wald χ^2値	Pr＞ChiSq	標準化回帰係数	オッズ比
切片	1.622	27.4457	＜0.0001		
収入	−0.15	4.6692	0.0307	-0.0608	0.855
学歴	−0.303	0.5674	0.4513	-0.021	0.898
フルタイム(ダミー)	0.04	0.5432	0.4611	-0.0234	0.657
専業主婦(ダミー)	−0.656	0.3693	0.5434	-0.0192	0.741
N＝1895　Wald χ^2値:8.30　Pr:0.08					

その結果、表に見られるとおり、**乳幼児のスマートフォン利用に最も関係するのは世帯年収であり**(負の相関)、**年収が低いほど乳幼児の利用率が高い**ことが確認された。

1.3　乳幼児のアプリ、コンテンツ利用

Q3 において、乳幼児に見せたり使わせたりしているスマートフォンやタブレット端末でよく利用しているサイトやアプリを質問した(複数回答)。なお、Q3 で回答しているのは、Q2(乳幼児が使ったり触ったりしている情報機器) において何らかの機器を選択した人、すなわち、「触らせていない」を選んだ人以外である（したがってこの質問の分析母数は N=1644 となる)。

表 1.3.1　年齢別にみた乳幼児に利用させているサイトやアプリ（単位：%）

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	全体(N=1644)
YouTube	74.8	71.6	84.7	86.1	85.4	84.9	84.4	82.4
YouTube以外の動画サイト・アプリ	6.1	8.6	9.3	7.5	5.0	8.7	8.6	7.8
LINE	10.7	7.3	6.9	9.9	10.8	11.9	12.6	10.0
LINE以外のSNS （Facebook、Instagramなど）	1.5	2.2	0.4	0.8	1.5	2.4	1.9	1.5
写真共有アプリ	10.7	19.8	21.8	18.7	13.8	11.1	11.2	15.5
ゲームアプリ	9.2	6.9	9.3	22.6	26.5	38.1	41.6	23.4
知育アプリ	10.7	14.7	19.4	23.8	27.3	30.2	28.6	23.1
子育てサポートアプリ(鬼から電話、など)	3.8	4.7	7.3	7.9	6.5	4.8	4.5	5.8
英語教育のための動画や音楽	11.5	8.2	10.5	6.3	5.8	7.5	4.8	7.5
絵本や童話	7.6	6.5	5.6	3.6	5.0	5.2	4.1	5.2
お絵かき	3.8	3.0	8.5	10.7	12.3	10.3	8.9	8.6

表 1.3.1 はその回答結果を年齢別に見たものであり、YouTube と LINE、ゲームアプリを取り出して図示したのが図 1.3.1 である。

1～6 歳の全体では、**最も回答比率が高かったのが「YouTube」で 82.4%**であった。ついで「ゲームアプリ(23.4%)」「知育アプリ(23.1%)」と続く。

年齢別に見た場合、0 歳児で既に YouTube の利用率は 74.8%に及ぶ(分析母数は Q2 の選択肢で何らかの情報機器に触れさせていると答えている人)。2 歳以降は 85%前後で推移している。

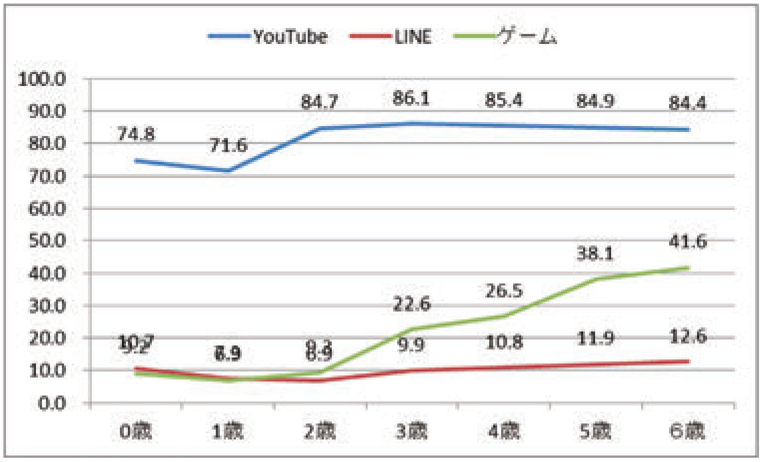

図 1.3.1　乳幼児の年齢別 YouTube、LINE、ゲームアプリの利用状況(単位：%)

表 1.3.2　年齢別にみた乳幼児が見ている動画 (単位：%)

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	全体(N=1379)
キャラクター・アニメ(アンパンマン、ドラえもん、など)	55.6	72.9	82.3	72.3	72.4	62.7	53.0	68.0
こども向け番組(いないいないばあっ！、など)	52.5	55.3	39.1	29.5	23.6	15.9	11.3	29.7
ユーチューバー	7.1	10.0	20.5	37.7	41.8	40.5	55.7	33.5
おもちゃの紹介	11.1	21.8	45.6	56.4	59.1	57.3	53.0	47.2
ゲームの攻略法、実況中継	2.0	2.9	0.9	3.2	7.1	14.5	18.7	7.8
音楽／歌手／ダンス	34.3	31.2	23.3	24.1	26.7	33.2	29.6	28.4
お笑い	3.0	1.8	1.4	1.8	1.3	2.3	3.9	2.2
乗り物	5.1	19.4	27.0	20.0	12.4	11.8	7.4	15.3
動物	4.0	12.9	10.2	8.2	4.9	9.5	5.2	8.0
スクイーズ	1.0	0.6	0.9	1.4	1.3	3.2	3.0	1.7
ハンドスピナー	1.0	0.6	0.5	0.0	0.9	1.4	0.4	0.7
教育・知育	8.1	13.5	12.6	10.5	11.1	9.1	7.8	10.4
読書、絵本	4.0	7.6	2.8	4.1	4.9	3.2	2.6	4.1
手遊び動画	10.1	20.0	17.2	10.5	9.3	5.5	3.9	10.6
本読み動画	5.1	10.6	5.6	3.6	5.3	3.6	3.0	5.1

表 1.3.2 では YouTube などの動画サイト・アプリで見ている動画の比率を示した。母数は前問 Q3 で「YouTube」「YouTube 以外の動画サイト・アプリ」選択した人 (N=1379) である。

最も見られている動画は「キャラクター・アニメ (アンパンマン、ドラえもん等)」であり、1-6 歳全体で 68.0%、0 歳で 55.6%に及ぶ。

0 歳では「子ども向け番組 (「いないいないばあっ!」等 (52.5%)」「音楽／歌手／ダンス (34.3%)」が多く、2 歳以降になると「おもちゃの紹介」「ユーチューバー」などの接触比率が増加していく。

２．乳幼児の情報機器やネット利用に関する懸念、期待、利用後の変化

2.1　乳幼児の情報機器やネット利用に関する懸念

表 2.1.1 には乳幼児の情報機器やネット利用に関する母親の懸念を（複数回答)、回答比率の高かった順に示した。

表 2.1.1　乳幼児の情報機器やネット利用に関する心配事(Q4)

使いすぎによる心身への悪影響	65.4
将来的に脳の発達に及ぶ悪影響	49.8
有害サイト・アプリ(ポルノ、犯罪、暴力、自殺、家出、薬物、違法バイト、出会い系などに関するもの)の利用・閲覧	48.2
使いすぎによる家族間のコミュニケーションの減少	38.0
架空請求・不当請求の被害に遭う	34.7
親の承諾なしに、オンラインショップやアプリで買い物や課金をする	33.1
自分から不用意に写真などを公開してしまう	27.2
他人にプライバシー情報をさらされる	25.5
特に心配していることはない	13.2

表に見られるとおり、最も**選択比率が高かったのは「使いすぎによる心身への悪影響（65.4%）**」であり、昨年同様（56.6%）の結果であった。**次に選択比率が高かったのは、「将来的に脳の発達に及ぶ悪影響**(49.8%)」であり、これも昨年同様の選択順位であった。

2.2　乳幼児の情報機器やネット利用に関する期待

Q6 では乳幼児の情報機器やネット利用のメリットについて質問した(複数回答)。

表 2.2.1 に示されるように、**最も選択比率が高かったのは「子守代わり**（静かにさせる、あやす、など)」**の項目（47.4%）**であった。「スマホは現代の子守代わり」とはしばしば言われることであるが、まさしく調査の結果がそのことを裏付けた形である。

次に選択比率が高かったのは「ネットからさまざまな情報を得ることができる(43.8%)」であり、以下「英語など語学能力の向上(9.6%)」「プログラミン後能力の向上（16.9%)」が続く。

表 2.2.1　乳乳幼児の情報機器やネット利用に関する期待 (Q5)(単位：%)

子守り代わり(静かにさせる、あやす、など)	47.4
ネットからさまざまな情報を得ることができる	43.8
英語など語学能力の向上	29.6
プログラミング能力の向上	16.9
表現能力の向上	15.1
情報リテラシーの向上	12.9
その他(具体的に)【　　】	1.1
メリットは特にない	14.1

2.3　乳幼児のスマートフォン利用後の変化

Q7 では子どもがスマートフォンに触れるようになってからの変化を質問した。回答者は子どもがスマートフォンに触れている人（N=1409)である。なお、選択肢は「あてはまる」「ややあてはまる」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の 4 択であるが、表 2.3.1 には前 2 者の「あてはまる」と答えた人の比率を示した。

表 2.3.1　スマートフォン利用後の子どもの変化

様々な情報に触れることで知識が増えた	47.9
楽しそうにしていることが多くなった	47.0
様々な情報に触れることで視野が広がった	38.3
ことばの発達が促進されたように思う	33.6
こどもとのコミュニケーションが増えた	24.5
見る情報が偏りがちになった	24.1
こどもとのコミュニケーションが減った	16.6
分からないことをすぐにネットで調べる習慣がついた	13.2
自ら情報発信することで自己表現に積極的になった	13.0
学習用サイトやアプリを利用することで勉強がはかどるようになった	11.7
娯楽目的に利用するばかりで勉強しなくなった	10.5
睡眠時間の減少、昼夜逆転など生活習慣が乱れるようになった	9.8
使いすぎで健康が損なわれた（視力の悪化、運動不足、肥満など）	9.0
ネットの情報に頼りきりになり自分で考えることをしなくなった	8.2
友だちと直接交流する機会が増えた	5.9
既存の友だちとの関係がさらに深まった	5.8
ことばの発達が遅れたように思う	4.5
こどもの人間関係が見えにくくなった	4.4
友だちと直接交流する機会が減った	4.0
ネットを通じて新たな友だち関係が生まれた	3.3

赤字の項目はどちらかといえばネガティブな方への変化

表に示されるとおり、「様々な情報に触れることで知識が増えた（47.9%)」が最も比率が高く、以下「楽しそうにしていることが多くなった（47.0%)」「様々な情報に触れることで視野が広がった（38.3%)」が続く。

提示した質問項目は比較的ポジティブなものが多く、回答結果も肯定的な項目が上位に並んでいるが、「見る情報が偏りがちになった（24.1%)」「こどもとのコミュニケーションが減った（16.6%)」などのネガティブな項目に「該当する」と答えた人も少なくない。

３．乳幼児のスマホ依存

3.1　乳幼児のスマホ依存傾向者率

Q8 ではヤングの 8 項目基準を元に、我々が乳幼児向けに一部修正を加えた「スマートフォン依存（以降「スマホ依存」）の判定項目」に該当するか否かを質問した。この質問に答えたのは乳幼児の情報機器利用質問（Q2)で「スマートフォンを利用している（見せたり、使わせたりしている)」と答えた人（N=1409)である。乳幼児に直接尋ねることは困難であるので、あくまで母親が自分の乳幼児に関して判断した結果である。

表 3.1.1　乳幼児向けスマホ依存判定項目ごとの該当率

すぐにスマートフォンを使いたがる(没入)	55.5
必要もないのに、いつまでもだらだらスマートフォンをいじっている(耐性・麻痺)	13.6
やめようね、と言ってもスマートフォンをやめない(制御不能)	39.1
スマートフォンを取り上げると機嫌が悪くなる(禁断症状)	46.7
決めた時間以上にスマートフォンをいじっていてやめられない(時間延長)	27.4
スマートフォンに夢中で約束をやぶったり、食事をとらなかったりすることがある(生活上のトラブル)	16.7
スマートフォンをしていたのに、していなかったフリをすることがある(隠蔽)	7.5
時間つぶしのためにスマートフォンをいじっている(現実逃避)	24.9

※括弧内は質問の趣旨で、アンケート上には表されない。

ちなみにヤング 8 項目基準の一般向けの質問文は下記の通りである(日本語は総務省情報通信政策研究所と橋元研究室の共同研究バージョンで毎年実施している「情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」で使用しているもの)。

(1)ネットを利用していない時も、ネットのことを考えている(没入)
(2)より多くの時間、ネットをしないと満足できない(耐性・麻痺)
(3)ネットの利用時間をコントロールしようとしても、うまくいかない(制御不能)
(4)ネット利用を控えようとすると、落ち着かなくなったり、いらいらしたりする(禁断症状)
(5)もともと予定していたよりも長時間ネットを利用してしまう(時間延長)
(6)ネットのせいで、家族・友人との関係が損なわれたり、仕事や勉強などがおろそかになりそうになっている(生活上のトラブル)
(7)ネットを利用している時間や熱中している度合いについて、家族や友人に嘘をついたことがある(隠蔽)
(8)現実から逃避したり、落ち込んだ気分を盛り上げるためにネットを利用している(現実逃避)

通常のヤング 8 項目基準の原則に従い、表 3.1.1 のうち、5 項目以上に「あてはまる」と答えた場合に「スマホ依存傾向が疑われる乳幼児(以降、「依存傾向者」。該当者の比率を「依存傾向者率」と呼ぶ)」とした。

この質問の回答対象は既述の通りスマートフォン利用乳幼児であるが、一般に「依存率」という場合、分母は分析母数全体（たとえば中学生対象調査であれば、分析した中学生全体に対する依存者の割合）であることが多いため、ここでも、分析の分母を調査対象者全体(N=2272)、分子を「依存傾向者の数」として計算した。

表 3.1.2 には，年齢別・男女別の乳幼児の依存傾向者率を示した。

表に示される通り、**依存傾向者率は0〜6歳全体では11.6%であるが、2歳児で既に13.3%**という数値を示していることは注目すべきであろう。

ちなみに総務省情報通信政策研究所と橋元研究室の共同研究による全国調査「情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査」の2017年度結果(総務省サイト上のほか『情報通信白書』にも記載)によれば、ネット依存率は10代20.1.%、20代7.4%、30代4.2%である。

表 3.1.2　年齢別・男女別乳幼児の依存傾向者率

	全体	男	女
0歳	1.9	1.2	2.5
1歳	9.9	9.9	9.9
2歳	13.3	14.2	12.3
3歳	14.5	13.6	15.4
4歳	14.2	13.6	14.8
5歳	12.3	13.6	11.1
6歳	14.9	12.2	17.7
全体(N=2272)	11.6	11.2	12.0

3.2　乳幼児のスマホ依存傾向と母親の依存傾向の相関

今回の調査で回答者である母親のスマホ依存に関しても質問している（Q13)。それによる**母親の依存傾向者率は12.7%**（全体の2,272人に対して）であった。

スマホ依存傾向に関し、母親とその乳幼児に関連があるか、両者の依存度の相関（ピアソンの積率相関係数)を示したのが表3.2.1である。ここではそもそも各質問で回答対象であったスマートフォン利用者に限定して(母親も乳幼児もスマートフォン利用者)、その依存得点（それぞれの依存傾向弁別質問Q8とQ13での該当個数合計)の相関を計算した(表3.2.1)。

表 3.2.1　母親と乳幼児の依存傾向度の相関（依存得点の相関係数。Nは母子ともにスマートフォンの利用者）

0歳（N=113)	0.402	***
1歳（N=202)	0.242	***
2歳（N=221)	0.257	***
3歳（N=220)	0.264	***
4歳（N=218)	0.298	***
5歳（N=211)	0.173	*
6歳（N=217)	0.374	***
全体(N=1402)	0.263	***

*:p<.05、***:p<.001

表に示される通り、全体でも乳幼児の年齢ごとでも、母子の依存傾向は有意な関連を示した。すなわち、**母親のスマホ依存傾向度が高ければ、その子の依存傾向度も高い**ことが示された。

3.3　乳幼児のスマホ依存傾向と年収・母親の職業・学歴

表 3.3.1　乳幼児の依存傾向者率と世帯年収・母親の職業・学歴（数値は各カテゴリーの分析標本全体に対する依存傾向者の比率）

世帯年収別(N=1896)		職業別(N=2065)		学歴別(N=2243)	
400万未満	14.1	フルタイム	13.5	高卒以下	**14.4**
400-600万未満	12.3	パート・バイト	**15.8**	短大・高専・専門	10.6
600-800万未満	9.9	専業主婦	10.7	大学卒以上	10.5
800-1000万未満	13.8	χ^2値	7.42	χ^2値	6.05
1000万以上	5.9	有意水準	＊	有意水準	＊
χ^2値	9.13				
有意水準	ns				

χ^2値は依存傾向者と非依存者に関するクロス集計結果(垂直列)　*:p<.05　ns:有意差なし
残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

表 3.3.1 では世帯年収、母親の職業・学歴別に乳幼児の依存傾向者率を示したものである。

表に示される通り、年収別はクロス集計全体の結果で有意ではなかったが、残差分析の結果**年収 1000 万以上の家庭の乳幼児の依存傾向率は有意に低かった。**

職業別では「パート・バイト」に乳幼児の依存傾向率が高く、一方専業主婦において低かった。

学歴別では**「高卒以下」において依存傾向率が高かった。**

さらに収入・学歴・職業の影響の大きさを見るために、その 3 変数（職業に関してはフルタイムと専業主婦をダミーとして投入）を説明変数、依存／非依存を目的変数としてロジスティック回帰分析を試みた(表 3.3.2)。

表に示される通り、収入だけが有意水準 5%未満で有意であり、**収入(世帯年収)が低いほど、依存傾向を有する乳幼児が多い**という結果が示された。

表 3.3.2　乳幼児の依存／非依存に関するロジスティック回帰分析

変数	回帰係数	Wald χ^2値	Pr＞ChiSq	標準化回帰係数	オッズ比
切片	-1.1797	18.7196	<.0001		
収入	-0.1241	4.3332	0.0374	-0.0915	0.786
学歴	-0.0819	2.031	0.1541	-0.058	0.823
フルタイム（ダミー）	0.2273	1.0727	0.3003	0.0462	0.816
専業主婦(ダミー)	-0.249	2.1657	0.1411	-0.0673	0.559
N＝1895　Wald χ^2値：12.94　Pr：0.012					

表 3.3.3 は補足として乳幼児の利用するサイト・アプリの利用者の依存傾向者率を示した。この分析では依存傾向者率は、各サイト・アプリ利用者の依存傾向者の人数を、各サイト・アプリ利用者の総数で除した比率である。

表に示される通り、ゲームアプリの利用者の 23.1%が依存傾向者であり、そのユーザーは依存傾向がかなり高い。

表 3.3.3　アプリ利用者の依存傾向者率（単位：%）

	依存者率	アプリ利用率
YouTube	17.7	82.4
YouTube以外の動画サイト	18.8	7.8
LINE	21.2	10.0
写真共有アプリ	22.0	15.5
ゲームアプリ	23.1	23.4

４．育児とスマートフォン、タブレット端末利用

子どものスマートフォン接触や利用に対して多大な影響をもたらすのは、もっとも身近な存在である親のスマートフォン利用である。ドイツではハンブルグの小学生たちが、「スマホ利用をやめて、ぼくたちと遊んで！」と親のスマートフォン利用に対し、デモを行ったというニュースがドイツの放送局の Twitter アカウントからその映像と共に投稿され、話題となっていた（DW News, 2018)。

McDaniel & Radesky(2017)は、家庭での親などの保護者によるモバイルテクノロジー利用時に、保護者が画面を閲覧する時間が親子間のコミュニケーションや交流を阻害することを“technoference（テクノフェレンス)”と名づけ、アメリカの 170 世帯（子どもの平均年齢 3.04 歳）を対象にその影響について調査を行った。その結果、48.0％の親が一日に 3 回以上のテクノフェレンスが発生していると回答し、分析の結果、母子間のテクノフェレンスは親子間の交流を阻害するとともに、子どもの抑うつや社会的引きこもりといった内在化問題行動や、攻撃、癇癪、多動性といった外在化問題行動への関連が見出されたという。近年、海外では、こうした親などの保護者によるモバイルテクノロジーの画面利用がもたらす妨害・干渉は Parent Screen Distraction（PSD）とも呼ばれ（Blackman, 2015 など)､その実態の把握と親子間の交流や子どもへもたらす影響を検討する研究が展開されつつある。他方、親の育児や家事を支える存在としても、モバイルテクノロジーは日常に欠かせないツールや情報源となっており、猫の手も借りたい家事育児場面での強い味方にもなっている（久保隅・橋元・大野, 2018)。母親自身は家庭において、スマートフォンやタブレット端末などのモバイルテクノロジーを、家事や育児のどのような場面でどのように利用しているのだろうか。そしてそれらの行動や影響をどのように捉えているのだろうか。本章では、育児や家事といった家庭の身近な場面おける母親のモバイルテクノロジー利用の実態を把握するとともに、これらの利用が子どもと一緒に過ごす場面において子どもとの交流の妨害・干渉や注意散漫をもたらす PSD の実態ついて概観する。さらに、PSD について母親自身がどのように認識し、捉えているのかも合わせて明らかにする。尚、本章の分析においては、日本での PSD の実態がほとんど把握されていないことを鑑み、基本的な子どもの年齢、職業、世帯年収、学歴の観点から検討したい。

4.1　子どもと一緒に過ごす場面での母親のスマートフォンおよびタブレット端末利用（Q17）　全体／子どもの年齢別／職業別／世帯年収別／学歴別分析結果

子どもと共に過ごす様々な生活場面において、母親はどの程度携帯電話、スマートフォン、タブレットなどの情報機器を利用しているのだろうか。はじめに、第 1 子が 6 歳以下の子どもを持つ母親の子どもと一緒に過ごす場面におけるスマートフォンやタブレット端末などの情報機器利用を概観する。Q17 では、母親が子どもと一緒に過ごす６つの生活場面

において、携帯電話やスマートフォン、タブレット端末などの情報機器をどの程度利用しているか、「よく利用している」、「時々利用している」、「あまり利用していない」、「まったく利用していない」の4件法でその回答を尋ねている。「よく利用している」、「時々利用している」の合計を利用、「あまり利用していない」、「まったく利用していない」を非利用の2値に弁別し、子どもの年齢別にそのパーセンテージと検定結果を示したのが表4.1.1である。

家の外で子どもと一緒に過ごす外食場面での母親の情報機器利用は全体で18.8%、概ね子どもの年齢が下がるほど利用率が高く、年齢が上がるほど利用率が低い傾向があり、有意差が見られた。特に2歳の子どもを持つ母親は29.3%と他の層と比較して有意に利用率が高い。最も利用率が低いのは5歳の子どもの母親で18.8%であった。本設問では、利用の目的や理由については尋ねておらず、あくまでも利用しているか否かの結果であるが、2歳という年齢は親が子どもに食べさせる時期から一人で食べることに移行する時期と想定され、このタイミングで子どもへ見せる、もしくは母親自身が端末を見るなどの機会が生じ、スマートフォン利用が増えていることが考えられる。

電車やバスなどの公共の場での母親のスマートフォン利用については、0歳児の母親で最も多く、57.4%と他の層と比較して有意に利用率が高い。0歳以外の年齢においては、年齢が上がるほど概ね利用率が上がる傾向があり、危険率1%水準で有意差が認められた。最も利用率が低かったのは1歳児の母親であり、39.5%と残差分析の結果においても有意に利用率が低かった。0歳児は抱っこ紐やベビーカーなどに乗せて移動することが多く、比較的母親の手が空くため、スマートフォンなどの端末を利用しやすいことが想定される。

続いて、**公園などでの外遊び中であるが、子どもの年齢が上がるほど情報機器の利用率が高く、有意差が見られた。子どもの年齢が下がるほど、母親が注意を払って見守っていることが想定され、そのためスマートフォンなどの情報機器利用率は低くなると考えられる**。5歳児、6歳児の子どもを持つ母親の外遊び中の情報機器利用率は残差分析の結果においても、有意に高い傾向が見られた。

その他、自宅での食事時間および自宅での遊び時間については、子どもの年齢による有意差は認められなかった。しかしながら、自宅での食事時間においては3歳の子どもの母親のみ、有意に利用率が低い結果となった。**自宅での遊びの時間は、全ての場面の中で最も母親の情報機器利用率が高く、全体で65%強の利用率**であったが、子どもの年齢による大きな差異は見られなかった。**授乳中のスマートフォン利用も自宅での遊び時間に次いで全体でも利用率が高く、0歳児の母親では70.4%と子どもとの時間の中でも最も高いスマートフォン利用率であった。**授乳は昼夜問わず行う必要があり、特に夜間などは電気を消したままである程度のまとまった時間を過ごす必要があり、手軽かつ電気を点けずに利用できるスマートフォンなどの情報機器が活用され、授乳中の情報機器利用が定着している

ようすが伺える。

表 4.1.1　全体および子どもの年齢別 子どもと一緒に過ごす場面での携帯電話・スマートフォン・タブレット端末の利用割合（単位：%）

		自宅での食事時間	外食時	電車やバスなど公共の場	公園など外での遊びの時間	自宅での遊びの時間	授乳中（過去の経験も含む）	N
全体		18.8	18.8	44.6	18.4	65.2	54.3	2272
子どもの年齢	0	21.0	27.5	**57.4**	11.7	64.2	**70.4**	324
	1	18.5	26.2	39.5	12.3	67.6	51.9	324
	2	20.4	**29.3**	38.3	14.5	66.0	52.5	324
	3	14.2	21.3	41.4	19.4	61.4	54.3	324
	4	19.1	21.9	43.2	20.4	67.6	53.4	324
	5	21.9	18.8	48.8	**24.4**	67.0	53.7	324
	6	16.2	19.8	43.9	**25.9**	62.8	43.9	328
χ2値(df=6)		9.648	18.004	34.129	41.924	5.203	49.377	
検定結果		n.s.	**	***	***	n.s.	***	

※「よく利用している」「時々利用している」と回答した割合と子どもの年齢のクロス集計の $\chi 2$ 検定結果。*** p<0.001, ** p<0.01, n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

続いて、職業別に子どもと一緒に過ごす場面での携帯電話、スマートフォン、タブレット端末利用率を示したのが表 4.1.2 である。**自宅での食事時間および、自宅での遊び時間を除き、職業別に有意差が認められた。**残差分析の結果においても、**フルタイムで働く母親は自宅での食事時間、外食時、電車やバスなど公共の場において、いずれも他の層と比較して有意に利用率が高い。**仕事を持ち、家事や育児と両立しているフルタイムの母親は、こうした子どもと共に過ごす時間をスマートフォン利用に充てたり、子どもと一緒に利用したりしているようである。特に電車やバスなどの公共の場でのフルタイム母親のスマートフォンなどの利用率は 52.4%と、自宅での遊び時間の利用に次いで利用率が高かった。**授乳中のみ、専業主婦の利用率が 54.9%と最も高く、有意差が見られた。**

表 4.1.2　職業別　子どもと一緒に過ごす場面での携帯電話・スマートフォン・タブレット端末の利用割合（単位：%）

	自宅での食事時間	外食時	電車やバスなど公共の場	公園など外での遊びの時間	自宅での遊びの時間	授乳中（過去の経験も含む）	N
全体	19.4	23.3	43.7	18.5	65.5	53.1	2065
フルタイム	**25.1**	**30.0**	**52.4**	19.3	62.8	51.9	347
パートタイム・アルバイト	21.8	26.3	41.5	**23.1**	66.8	**46.2**	316
専業主婦	17.5	21.0	42.0	17.3	65.8	**54.9**	1402
χ2値（df=2）	11.652	14.179	13.070	6.015	1.394	8.113	
検定結果	**	**	**	*	n.s.	**	

※育児休暇該当者を除く回答数。「よく利用している」「時々利用している」と回答した割合と職業のクロス集計のχ2 検定結果。** p<0.01，* p<0.05，n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準（両側検定）で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

世帯年収別に子どもと一緒に過ごす場面での携帯電話、スマートフォン、タブレット利用率を示したものが表 4.1.3 である。**電車やバスなどの公共の場および自宅での遊び時間のみ、世帯年収別に有意差が見られ、電車やバスなどの公共の場でのスマートフォン等の情報機器利用は世帯年収 800 万以上 1000 万未満で 54.6%、1000 万以上で 56.3%と半数以上の利用率となり、年収が高いほど有意に利用率が高かった。**子連れでの公共の場面では、年収が高いほど母親がスマートフォンを積極的に利用しているようすが伺える。**逆に自宅での遊び時間は年収が高いほど利用率が低く、残差分析の結果においても、世帯年収 1000 万以上で 56.3%と有意に利用率が低い結果となった。**

表 4.1.3　世帯年収別　子どもと一緒に過ごす場面での携帯電話・スマートフォン・タブレット端末の利用割合（単位：%）

		自宅での食事時間	外食時	電車やバスなど公共の場	公園など外での遊びの時間	自宅での遊びの時間	授乳中（過去の経験も含む）	N
全体		19.1	24.2	45.5	19.4	66.7	55.4	1896
世帯年収	400万未満	20.3	24.7	39.9	20.5	69.5	53.9	469
	400万-600万未満	20.1	24.0	42.7	18.4	67.8	57.3	668
	600万-800万未満	16.0	20.7	48.3	17.2	64.5	53.0	406
	800万-1000万未満	20.6	25.7	**54.6**	22.9	67.4	58.3	218
	1000万以上	17.0	**31.9**	**56.3**	20.7	56.3	54.1	135
χ2値（df=4）		4.021	7.393	23.021	3.871	9.525	3.212	
検定結果		n.s.	n.s.	***	n.s.	*	n.s.	

※「よく利用している」「時々利用している」と回答した割合と世帯年収のクロス集計のχ2 検定結果。*** p<0.001，* p<0.05，n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準（両側検定）で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

最後に学歴別に子どもと一緒に過ごす場面での携帯電話、スマートフォン、タブレット

端末利用率を表 4.1.4 に示す。**外食時の場面のみ、学歴が低いほどスマートフォン利用率が高い結果となり、危険率 5%水準で有意差が見られた。**外食時および電車やバスなどの公共の場を除き、それ以外の場面では学歴による利用率の差は見られなかった。

表 4.1.4 学歴別 子どもと一緒に過ごす場面での携帯電話・スマートフォン・タブレット端末の利用割合(単位：%)

		自宅での食事時間	外食時	電車やバスなど公共の場	公園など外での遊びの時間	自宅での遊びの時間	授乳中（過去の経験も含む）	N
	全体	18.7	23.4	44.6	18.4	65.3	54.5	2243
学歴	高卒以下	21.4	**28.1**	42.2	21.0	65.5	52.7	548
	短大および高専・専門学校卒	16.8	21.9	42.9	17.0	65.0	52.8	755
	大卒以上	18.7	21.8	**47.3**	18.1	65.4	56.8	940
	χ2値(df=2)	4.280	9.103	5.054	3.552	0.041	3.537	
	検定結果	n.s.	*	†	n.s.	n.s.	n.s.	

※「よく利用している」「時々利用している」と回答した割合と学歴のクロス集計の χ2 検定結果。* p<0.05, † p<0.1, n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

4.2 母親によるスマホ育児の実態（Q18） ー全体／子どもの年齢別／職業別／世帯年収別／学歴別分析結果

本節では家事や育児・養育場面において、母親がどのような目的や理由でスマートフォン、タブレット機器などを利用しているのかについて検討する。昨今、モバイルテクノロジーは子ども向けのコンテンツやアプリなども多数開発、提供されており、手軽に入手できる環境が整いつつある中、子どものスマホ依存が不安視されていることは先の章に呈示したとおりであるが、近年、スマートフォンで子どもをなだめたり、電車などの公共の場で子どもにスマートフォンを見せて静かに過ごさせるといった姿も見かけられるようになった。筆者も未就学児の子どもを持つ母親であるが、機嫌の悪い子どもをあやすために、子どもが好み、関心を引くような短い YouTube 動画を見せて気分を変えさせたり、家事や仕事などを 1 人で片付けなければならない際などに、致しかたなくある一定の時間子どもを集中させることができるスマートフォンを最終手段として用いたりすることがある。すでにスマートフォンは母親の家事育児を支援するパートナーとしても利用されており、身近に使える“スマホ育児”は今後スタンダードになっていくことも考えられる。そこで、家事や育児・養育場面でのモバイルテクノロジー利用について検討するため、Radesky, Peacock-Chambers, Zuckerman & Silverstein(2016)による情報機器の家事・養育場面の利用実態に関する設問を採用し、日本の状況や文脈に照らし合わせて和訳と文言修正を行い、家事および育児・養育場面でのスマホ利用の理由・目的を尋ねる設問を設定した。回答は「かなりある」、「ややある」、「あまりない」、「まったくない」の 4 件法で求め、「かなりあ

る」、「ややある」を合算して利用ありと定義したパーセンテージを算出した。いずれも母数はスマートフォン、タブレット機器および携帯電話利用者のみである。

はじめに、全体および子どもの年齢別にスマホ育児の理由・目的の回答率および検定結果を表 4.2.1 に示す。**最も多いスマホ育児は「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき」で 51.2%、次いで「家で静かに過ごさせるため」の 50.5%、「怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため」および「自分が家事をするときの子守り代わり」のいずれも 49.5%**であった。**全体で約半数の母親がスマートフォンを活用したスマホ育児をこれら日常の家事や養育場面で行っていることが示された。**「食事中のとき」および「寝かしつけのとき」はいずれも 10%強と該当率は低かった。

表 4.2.1　子どもの年齢別　育児におけるスマートフォン・タブレット端末の利用目的（単位：%）

		怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため	家で静かに過ごさせるため	食事中のとき	電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき	自分が家事をするときの子守代わり	寝かしつけのとき	N
全体		49.5	50.5	10.4	51.2	49.5	11.0	1595
子どもの年齢	0	52.5	38.3	8.3	28.3	45.0	**20.8**	120
	1	**70.4**	45.7	11.7	44.4	44.8	12.6	223
	2	54.1	50.8	**13.9**	**57.0**	54.1	13.5	244
	3	45.2	53.6	10.5	51.2	52.4	12.9	248
	4	43.4	52.0	13.3	53.1	53.1	8.2	256
	5	42.2	46.7	7.4	54.9	47.1	8.2	244
	6	43.1	**59.2**	6.9	56.5	46.9	6.2	260
χ2値(df=6)		56.679	19.647	12.241	37.187	8.400	25.206	
検定結果		***	**	†	***	n.s.	***	

※スマートフォン、タブレット機器、携帯電話非利用者を除く回答数。「よく利用している」「時々利用している」と回答した割合と子どもの年齢のクロス集計のχ2 検定結果。*** p<0.001, ** p<0.01, † p<0.1, n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準（両側検定）で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

子どもの年齢別にスマホ育児の理由・目的を概観すると、**最も回答割合の高い「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき」では、0 歳児、1 歳児の母親の回答割合が低く、2 歳児で 57.0%と最も回答割合が高く、有意差が認められた。**一人で自由に動き回れ、イヤイヤ期を迎える 2 歳児の子どもを持つ母親は、特に公共の場で子どもが他者に迷惑をかけたり、騒いだりすることを避けるため、スマホを活用して子どもに飽きさせないように過ごさせるなどしてスマホ育児を行っていることが想定される。

親の指示に耳を傾け、行動できるようになる 4 歳以降の年齢では公共場面でのスマホ育児回答割合が低い。回答割合は低いものの、同様の傾向を示したのが「食事中のとき」であり、2 歳児の母親が最も回答割合が高く 13.9%で、残差分析の結果でも有意に回答率が高かった。逆に、**「家で静かに過ごさせるため」は概ね年齢が上がるほど回答割合が上がり、0 歳児の母親で 38.3%と最も低く、6 歳児の母親で 59.2%と最も高く、1%水準で有意差が見られた。「怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため」は 1 歳児母親で 70.4%と最も回答割合が高く、次いで 2 歳児母親の 54.1%と年齢別に有意差が見られた。**スマホで子どもの注意を引き、機嫌の切り替えを行うという行為は、概ね 0 歳児から 3 歳児の年齢で多く行われているようである。**「寝かしつけのとき」は 0 歳児の母親で 20.8%と最も回答割合が高く、子どもの年齢で有意差が認められた。**0 歳児で回答割合が最も高いのは、子どもに見せて寝かしつけるというよりも、日中数時間おきに授乳や寝かしつけを行う際に、母親自身がスマートフォンをみながらの“ながら育児”を行っているようすが想定されよう。最後に「自分が家事をするときの子守代わり」であるが、2 歳児母親 54.1%、3 歳児母親 52.4%、4 歳児母親 53.1%で、他の年齢と比較して 5 ポイント程度回答割合が高いものの、有意差は認められなかった。**子どもの年齢にかかわらず、家事をする際にスマホ育児が約半数の母親に用いられていることは、スマホ育児が子守り手段としてすでにある一定の存在となっていることを示しているといえよう。**

次に職業別にスマホ育児の理由・目的の回答率および検定結果を表 4.2.2 に示す。**全体的にフルタイムの回答割合が高い傾向があるものの、「寝かしつけのとき」以外は有意差が認められなかった。**「寝かしつけのとき」は、フルタイムで 16.7%、次いでパートタイム・アルバイト 10.2%、専業主婦 9.5%の回答割合であり、1%水準で有意差が認められ、また、残差分析の結果でもフルタイムで有意に利用率が高く、専業主婦で有意に利用率が低い結果となった。**フルタイムの母親は、他の職業と比較して、スマホ育児に積極的な様子が伺える。それに対して、専業主婦の母親は比較的スマホ育児の該当率が他の層と比較して低い傾向が見られる。**

表 4.2.2　職業別　育児におけるスマートフォン・タブレット端末の利用目的(単位：%)

		怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため	家で静かに過ごさせるため	食事中のとき	電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき	自分が家事をするときの子守代わり	寝かしつけのとき	N
	全体	49.8	51.1	10.8	51.2	49.1	10.8	1470
職業	フルタイム	52.3	48.1	**14.6**	54.8	51.9	**16.7**	239
	パートタイム・アルバイト	45.5	56.6	9.4	53.7	52.5	10.2	244
	専業主婦	50.3	50.5	10.2	49.6	47.6	9.5	987
	χ2値(df=2)	2.491	3.923	4.468	2.806	2.708	10.475	
	検定結果	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**	

※育児休暇該当者およびスマートフォン、タブレット機器、携帯電話非利用者を除く回答数。「よく利用している」「時々利用している」と回答した割合と職業のクロス集計のχ2検定結果。** p<0.01, n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

続いて、世帯年収別にスマホ育児の実態をみてみよう。表 4.2.3 に示すように、職業別と同様に、世帯年収別でも「怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため」、「家で静かに過ごさせるため」、「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき」、「自分が家事をするときの子守代わり」、「寝かしつけのとき」の 5 項目においては有意差が見られなかった。「食事中のとき」のみ、5%水準で有意差が認められ、残差分析の結果、世帯年収が 600 万以上 800 万未満の母親で有意に該当率が低かった。

表 4.2.3　世帯年収別　育児におけるスマートフォン・タブレット端末の利用目的(単位：%)

		怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため	家で静かに過ごさせるため	食事中のとき	電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき	自分が家事をするときの子守代わり	寝かしつけのとき	N
	全体	49.5	50.4	10.2	52.2	50.0	10.8	1365
世帯年収	400万未満	49.7	54.2	11.6	46.7	53.0	11.6	336
	400万-600万未満	50.2	50.6	10.8	52.6	52.0	10.8	500
	600万-800万未満	51.7	48.3	5.4	54.7	45.6	10.5	296
	800万-1000万未満	44.4	46.4	11.8	56.9	44.4	11.1	153
	1000万以上	45.0	48.8	15.0	53.8	52.5	8.8	80
	χ2値(df=4)	2.882	3.496	10.788	6.235	6.362	0.620	
	検定結果	n.s.	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.	

※スマートフォン、タブレット機器、携帯電話非利用者を除く回答数。「よく利用している」「時々利用している」と回答した割合と世帯年収のクロス集計のχ2検定結果。 * p<0.05, n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

学歴別にスマホ育児の理由・目的の該当率および検定結果を表 4.2.4 に示す。職業別と全く正反対に、学歴別では「食事中のとき」を除いた 5 項目で有意差が認められた。特徴的であるのは、**高卒以下の学歴において、「怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため」、「家で静かに過ごさせるため」、「自分が家事をするときの子守代わり」の 3 項目で他の層と比較してスマートフォン・タブレット端末の利用率が高く、残差分析の結果でも有意に高い傾向が見られた。**「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき」のみ、高卒以下の学歴の利用率が有意に低く、公共の場でのスマホ利用は非積極的なようすが伺える。学歴が高くなるほど利用率が下がる傾向が見られ、**概ね低学歴の母親はスマホ育児に積極的であり、高学歴の母親であるほどスマホ育児にはやや消極的である**といえよう。

表 4.2.4　学歴別　育児におけるスマートフォン・タブレット端末の利用目的(単位：%)

		怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため	家で静かに過ごさせるため	食事中のとき	電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき	自分が家事をするときの子守代わり	寝かしつけのとき	N
	全体	49.6	50.7	10.3	51.0	49.5	10.9	1579
学歴	高卒以下	**56.7**	**57.0**	11.4	43.5	**57.0**	13.9	402
	短大および高専・専門学校卒	49.2	50.7	9.8	53.7	46.5	10.9	531
	大卒以上	45.5	46.9	9.9	53.4	47.4	9.0	646
	χ2値(df=2)	12.508	10.037	0.824	11.984	12.027	6.261	
	検定結果	**	**	n.s.	**	**	*	

※スマートフォン、タブレット機器、携帯電話非利用者を除く回答数。「よく利用している」「時々利用している」と回答した割合と学歴のクロス集計の χ2 検定結果。** p<0.01, * p<0.05, n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

4.3 育児ストレスとスマホ育児

スマホ育児はフルタイムの母親、そして学歴が低い母親で積極的に利用する傾向が示されているが、日常の育児で困難を抱えている人ほど、スマホを活用したスマホ育児を行っている可能性が考えられよう。そこで、本節では、スマホ育児と育児ストレスの関係について検討する。母親が抱える育児ストレスの測定には、荒木ら（荒木, 兼松, 横沢, 荒屋敷, 相墨 & 藤島, 2005)により開発された、育児ストレスショートフォーム日本版 Parenting Stress Index（以下、PS－SF実用版）を採用し、対象者の負荷を鑑み、原版全19項目のうち、子どもの特徴に関するストレスから「私のこどもは、私が喜ぶことはほとんどしない」、「私のこどもは、他のこどもより手がかかるようだ」、「私のこどもは、いつも私につきまとって離れない」の 3 項目、親自身に関するストレスから「私はこどもを産んでから、やりたいことがほとんどできないと感じている」、「こどもを産んでから、私

の周囲の人は、期待したほど援助やサポートをしてくれない」、「私は以前のように物事を楽しめない」の３項目の合計６項目を採用した。また、本調査の対象者である母親の状況や実態を鑑み、夫やパートナーが不在の母親も調査対象に含まれる可能性があるため、「こどもを産んでから、私の周囲の人は、期待したほど援助やサポートをしてくれない」のみ、オリジナル版の「こどもを産んでから、私の夫は、期待したほど援助やサポートをしてくれない」から文言変更を行った。また、回答の選択肢はオリジナルのPS－SF実用版と同様に「まったく違う」、「違う」、「どちらともいえない」、「そのとおり」、「まったくそのとおり」の5件法を採用した。表4.3.1に全６項目を合算した育児ストレス得点を算出し、スマホ育児の利用有無別にt検定を行った結果を示す。

全ての項目において、スマホ育児の利用ありの母親の育児ストレス得点が、スマホ育児利用なしの母親を上回っており、「怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため」、「家で静かに過ごさせるため」、「食事中のとき」の３項目で危険率 0.1%水準、「電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき」、「自分が家事をするときの子守代わり」の２項目で1%水準、「寝かしつけのとき」において5%水準で有意差が認められた。この結果から、**スマホ育児を行っている母親は、非利用の母親と比較して育児ストレスが高い**といえよう。スマホは子どもにとって依存などを引き起こしかねない存在であるが、日々の育児ストレスを抱える母親にとっては、その育児の負担を軽減しうる存在として活用されている可能性があり、育児ストレスとスマホ育児の関係やその役割、効用、ポジティブおよびネガティブな効果等についてもさらなる調査研究が求められる。

表 4.3.1　スマホ育児利用と育児ストレス得点

	怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため		家で静かに過ごさせるため		食事のとき	
利用有無	なし	あり	なし	あり	なし	あり
N	805	790	789	806	1429	166
育児ストレス得点（平均）	13.89	15.27	14.00	15.13	14.39	16.13
SD	4.23	4.59	4.30	4.55	4.32	5.32
t値	t(1593.00)=-6.267		t(1593.00)=-5.075		t(191.078)=-4.049	
検定	***		***		***	
	電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき		自分が家事をするときの子守代わり		寝かしつけのとき	
利用有無	なし	あり	なし	あり	なし	あり
N	779	816	806	789	1420	175
育児ストレス得点（平均）	14.26	14.88	14.21	14.95	14.47	15.40
SD	4.43	4.48	4.26	4.63	4.37	5.09
t値	t(1593.00)=-2.778		t(1593.00)=-3.314		t(206.810)=-2.313	
検定	**		**		*	

※t 検定の結果。*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05。

4.4 母親の情報機器画面閲覧による干渉・妨害（Parent Screen Distraction: PSD）

4.4.1 情報機器画面閲覧による干渉・妨害の実態（Q19）—全体／子どもの年齢別／職業別／世帯年収別／学歴別分析結果

近年、欧米では親やケアギバーなどの保護者が携帯電話などの画面を見ている時間が、子どもへの注意散漫をもたらしたり、子どもとの顔を直接突き合わせた会話やコミュニケーションを阻害したりするなどといった、子どもへの悪影響を懸念した研究が興隆しつつある。こうした保護者の画面閲覧による注意散漫や干渉、妨害は、“technoference（テクノフェレンス）”（McDaniel & Radesky, 2017）、“The technology device interference”（McDaniel & Coyne, 2014）、“PSD：Parent screen distraction”（Blackman, 2015）といった類似の概念が定義、提唱され、その実態把握や子どもへの影響、そして保護者および子どもの属性や養育スタイルとの関連などの調査研究が展開されている（Kildare & Middlemiss, 2017）。本節では、日本の母親によるこれらの情報機器画面閲覧による干渉・妨害（以下、PSD）の実態を把握するとともに、母親の PSD への認識や態度を概観する。

母親による PSD はどのような情報機器により、どの程度の頻度で発生しているのだろうか。はじめに、McDaniel & Coyne（2016）を参照し、情報機器毎にどの程度の頻度で PSD が発生しているかを、スマートフォン、携帯電話（ガラケー）、タブレット端末（iPad など）、パソコン、携帯ゲーム機、据え置き型ゲーム機、音楽プレイヤー、テレビの８つの情報機器について、「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に「1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」、「まったくない」の 6 件法で尋ねた。設問文は「あなたはふだん、あなたのお子さんとの会話や活動中に、次の情報機器に気がそれてしまうことがどの程度ありますか。 あてはまるものをお選びください。」であった。表 4.4.1.1 に機器毎に PSD の有無を全体および子どもの年齢別に示す。尚、PSD の有無については、「まったくない」の回答を除くすべての回答を「PSD 有り」と集計した結果を指す。

表 4.4.1.1　全体および子どもの年齢別　PSD 機器（単位：%）

		スマートフォン	携帯電話（ガラケー）	タブレット端末（iPad など）	パソコン	携帯ゲーム機	据置き型ゲーム機	音楽プレイヤー	テレビ	N
全体		80.5	2.3	7.9	10.2	4.2	2.9	2.9	69.1	2272
子どもの年齢	0	79.3	1.9	3.7	8.3	2.8	1.5	1.9	66.7	324
	1	83.0	2.8	8.3	8.3	4.6	2.8	3.4	72.2	324
	2	79.0	0.9	9.9	8.0	2.8	1.2	3.4	66.4	324
	3	79.0	2.8	9.6	9.0	3.4	3.1	1.5	69.8	324
	4	80.9	1.9	7.1	**13.6**	3.1	2.2	2.5	70.7	324
	5	79.6	2.8	8.3	10.8	6.2	**5.6**	3.7	69.4	324
	6	82.9	3.4	8.5	**13.4**	**6.4**	4.0	3.7	68.6	328
χ2値(df=6)		3.934	5.818	11.424	12.549	12.064	15.402	5.635	4.019	
検定結果		n.s.	n.s.	†	†	†	*	n.s.	n.s.	

※「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」と回答した割合と子どもの年齢のクロス集計の χ2 検定結果。* p<0.05, † p<0.1, n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

少なくとも週に 1 回以上の PSD をもたらしている情報機器は、全体でスマートフォン 80.5%、テレビ 69.1%、次いでパソコン 10.2%、タブレット端末（iPad など）7.9%、携帯ゲーム機 4.2%が続き、携帯電話（ガラケー）、据え置き型ゲーム機、音楽プレイヤーは 2%強という結果であった。圧倒的にスマートフォンとテレビが PSD をもたらす情報機器として母親に認識されているようすが伺える。この二大 PSD 機器であるスマートフォンおよびテレビの PSD 頻度について詳しくみてみると、一日に 1 回以上 PSD が発生しているとした回答は、スマートフォンで 58.3%、テレビで 51.0%となっており（図 4.4.1.1）、これらの情報機器が日々子どもとの対面時間を妨害している可能性が問題視されよう。しかしながら、表 4.4.1.1 に示すように、二大 PSD 機器であるスマートフォン、テレビ、そして音楽プレイヤーはいずれも子どもの年齢による PSD 有無に有意差は認められず、据え置き型ゲーム機で 5%水準、そしてタブレット端末（iPad など）、パソコン、および携帯ゲーム機で 10%水準の有意傾向が見られる程度であった。

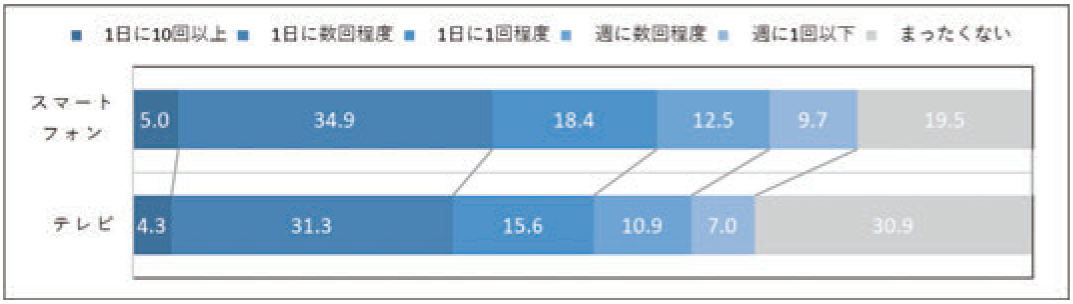

図 4.4.1.1　スマートフォンおよびテレビにおける PSD 頻度（単位：%）

次に職業別に情報機器毎の PSD の有無を示したものが表 4.4.1.2 である。スマートフォンは子どもの年齢別と同様、職業による有意差は見られなかった。据え置き型ゲーム機は危険率 1%水準、そして音楽プレイヤーは 5%水準で有意差が認められ、残差分析の結果においてもパートタイム・アルバイトで最も PSD が多く、専業主婦で少ない傾向であった。タブレット端末（iPad など）も 5%水準で有意差が見られ、残差分析の結果、フルタイムの母親の PSD 発生割合が最も多かった。

表 4.4.1.2 職業別　PSD 機器（単位：%）

		スマートフォン	携帯電話（ガラケー）	タブレット端末（iPadなど）	パソコン	携帯ゲーム機	据置き型ゲーム機	音楽プレイヤー	テレビ	N
	全体	80.3	2.3	8.2	10.2	4.4	3.0	3.0	69.1	2065
職業	フルタイム	77.5	**4.0**	**11.2**	13.0	4.3	3.2	3.7	63.7	347
	パートタイム・アルバイト	82.3	1.9	9.8	11.4	**7.0**	**5.4**	**4.7**	69.3	316
	専業主婦	80.5	2.0	7.1	9.3	3.9	2.4	2.4	70.3	1402
	χ2値(df=2)	2.520	5.383	7.438	4.703	5.929	7.770	6.065	5.749	
	検定結果	n.s.	†	*	†	†	**	*	†	

※育児休暇該当者を除く回答数。「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」と回答した割合と職業のクロス集計の χ2 検定結果。** p<0.01, * p<0.05, † p<0.1, n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準（両側検定）で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

続いて世帯年収別に情報機器毎の PSD の有無を示したものが表 4.4.1.3 である。**パソコンを除くすべての情報機器で、いずれも有意な関連を示したものはなかった。**パソコンのみ、世帯年収 800 万円以上 1000 万円未満で 20.6%の PSD 割合となっており、次いで 1000 万円以上の 13.3%であった。最も少ないのは世帯年収 400 万円以上 600 万円未満で 8.5%であり、残差分析の結果、有意に PSD 割合が低く、世帯年収 800 万円以上 1000 万円未満は有意に PSD 割合が多い結果となった。概して、**世帯年収が高いほど、パソコンによる PSD 割合が高い**といえよう。

表 4.4.1.3　世帯年収別　PSD 機器（単位：%）

		スマートフォン	携帯電話（ガラケー）	タブレット端末（iPadなど）	パソコン	携帯ゲーム機	据置き型ゲーム機	音楽プレイヤー	テレビ	N
	全体	81.4	2.3	8.1	11.0	4.4	3.1	3.1	70.5	1896
世帯年収	400万未満	79.7	2.6	7.2	9.4	4.3	2.6	2.8	71.2	469
	400万-600万未満	83.5	1.8	7.2	8.5	5.2	3.3	3.0	71.0	668
	600万-800万未満	81.5	2.0	9.1	11.1	2.7	2.7	2.5	72.4	406
	800万-1000万未満	81.2	2.3	10.6	**20.6**	6.0	4.1	4.1	64.7	218
	1000万以上	76.3	5.2	8.9	13.3	3.0	3.7	4.4	69.6	135
	χ2値(df=4)	5.185	6.034	3.627	26.813	5.854	1.671	2.341	4.500	
	検定結果	n.s.	n.s.	n.s.	***	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	

※「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」と回答した割合と世帯年収のクロス集計の χ2 検定結果。*** p<0.001, n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準（両側検定）で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

最後に学歴別に各情報機器の PSD 該当割合および検定結果を表 4.4.1.4 に示す。**パソコンのみ、危険率 0.1%水準で有意な関連が認められ、大卒以上で 13.6%と PSD の割合が高い**。残差分析の結果においても、高卒以下および短大及び高専・専門学校卒において有意に PSD 割合が低く、大卒以上で多い結果となった。子どもがいる家庭での時間に大卒以上の母親はパソコンを利用しており、それが PSD を発生させているようすが伺える。携帯ゲーム機およびテレビも 5%水準で有意な関連が認められ、携帯ゲーム機は高卒以下で、テ

レビは短大及び高専・専門学校卒で PSD 割合が最も高かった。それ以外は有意な関連を示した情報機器はなかった。

表 4.4.1.4　学歴別　PSD 機器(単位：%)

		スマートフォン	携帯電話（ガラケー）	タブレット端末（iPadなど）	パソコン	携帯ゲーム機	据置き型ゲーム機	音楽プレイヤー	テレビ	N
	全体	80.4	2.3	8.0	10.2	4.2	2.9	2.9	69.2	2243
学歴	高卒以下	78.8	1.8	7.7	7.1	**6.2**	3.1	2.0	67.3	548
	短大および高専・専門学校卒	81.1	3.0	8.6	8.1	3.7	3.8	3.0	**72.7**	755
	大卒以上	80.7	2.0	7.7	**13.6**	3.5	2.1	3.2	67.6	940
	χ2値(df=2)	1.133	2.723	0.613	21.439	6.972	4.369	1.904	6.470	
	検定結果	n.s.	n.s.	n.s.	***	*	n.s.	n.s.	*	

※「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」と回答した割合と学歴のクロス集計の χ2 検定結果。*** p<0.001, * p<0.05, n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

4.4.2　日常生活場面における母親の PSD 状況認識(Q20)　―全体／子どもの年齢別／職業別／世帯年収別／学歴別分析結果

PSD 発生の有無を機器別に概観してきたが、具体的にどのような PSD 状況が発生しているのかについて、スマートフォンおよびテレビによる PSD について尋ねたものが Q20 である。本設問では、Hiniker, Sobel, Sung, Lee & Kientz(2015)により開発された、生活場面でのモバイルテクノロジーの干渉・妨害状況に関する先行研究をもとに、日本の状況や文脈を鑑みて和訳および文言の修正を行った設問を採用した。該当設問は、「こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう」、「こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう」、「こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう」、「こどもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう」の 4 項目である。また、PSD により想定される状況について、オリジナルで「こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている」、「スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある」を追加し、全 6 問を設定した。なお、選択肢には回答者の回答しやすさを鑑み、オリジナル版の 8 件法から「1. 1 日に 10 回以上」、「2. 1 日に数回程度」、「3. 1 日に 1 回程度」、「4. 週に数回程度」、「5. 週に 1 回以下」、「6. まったくない」の 6 件法に変更している。

表 4.4.2.1 に子どもの年齢別に母親の PSD 状況の有無と検定結果を示す。子どもと一緒に過ごす生活場面において母親による PSD の実態状況を尋ねた**「こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう」は全体で 63.6%、「こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう」57.4%、「こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう」73.5%、**

「こどもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう」64.7%と全ての項目で 5 割を超えていた。日常で子どもとの時間に PSD が入り込み、食事や会話時間といった子どもとのコミュニケーションや交流を妨げている可能性が示唆される。PSD による子どもへの注意散漫などの悪影響について尋ねた項目でも、**「こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている」68.0%と約 7 割近くの母親が PSD による注意散漫状況を認識しており、さらに、その結果として子どもが怪我の危険にさらされた経験の有無についても、23.7%の母親で「スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある」経験を持っていることが明らかとなった。少なくとも 7 割以上の母親が何らかの PSD 経験を持ち、さらに 20%強の母親が PSD により子どもの危険状況を招いていたことは刮目に値する。**

子どもの年齢別に母親の PSD 状況をみてみると、**「こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう」、「こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう」、「こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう」の 3 項目で 0.1%水準、「こどもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう」は 1%水準で有意差が認められ、概ね 0 歳児の母親で該当率が最も低く、子どもの年齢が上がるほど PSD 経験の回答割合が高かった。**PSD による注意散漫状況について、「こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている」において、やや有意な関連が見られ、残差分析の結果では、0 歳児の母親で有意に該当率が低かった。0 歳児はまだまだ母親が手をかけ、常に面倒を見ている状況のため、比較的他の層より回答割合は低いものの、それでも 4 割以上で PSD が発生している状況は多いと言わざるを得ないだろう。残差分析の結果でも、**「こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう」、「こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう」、「こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう」の 3 項目で 5 歳、6 歳児を持つ母親の回答割合が有意に高く、子どもの年齢が上がると母親も目を離しやすくなってしまう状況が発生しているといえよう。**「こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている」「スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある」はいずれも、有意差はないものの 1 歳児を持つ母親で該当率が高く、ハイハイから一人歩きに移行していく 1 歳児の子どもの PSD による危険状況発生の可能性が示唆される。

表 4.4.2.1　全体および子どもの年齢別　日常生活場面での母親の PSD 状況認識（単位：%）

		こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう	こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう	こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう	こどもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう	こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている	スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある	N
全体		63.6	57.4	73.5	64.7	68.0	23.7	2272
子どもの年齢	0	**43.5**	**49.4**	**60.8**	**55.9**	**62.3**	21.0	324
	1	**64.5**	52.8	69.1	61.7	72.2	27.5	324
	2	65.7	55.2	72.2	64.2	68.8	21.9	324
	3	66.7	58.3	77.5	68.2	63.6	22.2	324
	4	67.3	56.2	76.2	68.8	68.2	22.5	324
	5	**68.8**	**67.6**	**79.0**	68.5	70.4	25.9	324
	6	**68.6**	**62.5**	**79.9**	65.9	70.1	25.0	328
χ2値(df=6)		67.774	29.537	46.079	18.796	11.937	6.261	
検定結果		***	***	***	**	†	n.s.	

※「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」と回答した割合と子どもの年齢のクロス集計の χ2 検定結果。*** p<0.001, ** p<0.01, †p<0.1, n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準（両側検定）で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

続いて、職業別および世帯年収別に母親の PSD 状況の該当割合および検定結果を表 4.4.2.2 および 4.4.2.3 に示す。いずれも、全ての項目において有意差は見られず、残差分析の結果もほぼ同様であった。世帯年収別の分析において、「スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある」のみ、残差分析の結果、世帯年収 400 万以上 600 万円未満の世帯年収の母親の回答割合が低いことが示されたが、それ以外に母親による PSD は職業や世帯年収の影響はほとんどないと考えられる。

表 4.4.2.2　職業別　日常生活場面での母親の PSD 状況認識（単位：%）

		こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう	こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう	こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう	こどもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう	こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている	スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある	N
全体		63.5	57.6	73.9	64.9	67.5	23.4	2065
職業	フルタイム	63.4	58.2	72.0	60.5	67.4	25.9	347
	パートタイム・アルバイト	65.8	61.7	73.4	64.2	65.8	24.4	316
	専業主婦	63.1	56.6	74.5	66.2	67.9	22.6	1402
χ2値(df=2)		0.857	2.856	0.888	4.011	0.510	1.894	
検定結果		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	

※育児休暇該当者を除く回答数。「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」と回答した割合と職業のクロス集計の χ2 検定結果。n.s. 有意差なし。

表 4.4.2.3　世帯年収別　日常生活場面での母親の PSD 状況認識(単位：%)

		こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう	こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう	こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう	こどもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう	こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている	スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある	N
	全体	64.1	57.9	73.9	65.9	68.7	24.2	1896
世帯年収	400万未満	62.3	56.7	70.6	64.2	67.4	26.9	469
	400万-600万未満	62.6	57.8	76.0	66.9	68.9	21.4	668
	600万-800万未満	65.8	56.4	73.2	66.3	69.0	25.6	406
	800万-1000万未満	70.2	61.9	76.6	63.8	70.2	26.6	218
	1000万以上	63.0	60.0	72.6	68.9	69.6	20.7	135
	χ2値(df=4)	5.434	2.338	5.348	1.927	0.680	6.667	
	検定結果	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	

※「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」と回答した割合と世帯年収のクロス集計の χ2 検定結果。n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が赤字のものは「有意に低い」ことを示す。

最後に、学歴別に母親の PSD 状況をみてみよう。表 4.4.2.4 に示すように、**「こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう」において 1%水準で有意差が見られ、高卒以下で有意に回答割合が低く、大卒以上で有意に回答割合が高い結果となり、学歴が上がるほど回答割合が高かった。**子どもとの食事中にスマートフォンなどの機器の利用を尋ねた Q18 では、高卒以下の母親の回答割合が最も高く、本設問とは逆の結果となっていることを鑑みると、子どもの躾や育児目的ではスマートフォンなどの情報機器を利用はしていないが、母親自身がつい画面を見てしまう、利用してしまう機会はかなりの程度あることが推察される。また「こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている」の項目において、やや有意な関連が見られ、**全項目において概ね、学歴が上がるほど、母親自身が生活場面において子どもと過ごす時間の中で PSD が発生している状況を認識している**といえよう。

表 4.4.2.4　学歴別　日常生活場面での母親の PSD 状況認識(単位：%)

		こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう	こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう	こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう	こどもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう	こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている	スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある	N
	全体	63.7	57.4	73.5	64.8	68.0	23.5	2243
学歴	高卒以下	57.5	54.7	71.9	64.8	64.2	22.1	548
	短大および高専・専門学校卒	63.8	59.1	74.4	66.6	69.4	23.6	755
	大卒以上	**67.1**	57.7	73.7	63.3	69.1	24.4	940
	χ2値(df=2)	13.939	2.470	1.087	2.028	4.828	1.002	
	検定結果	**	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.	

※「1 日に 10 回以上」、「1 日に数回程度」、「1 日に 1 回程度」、「週に数回程度」、「週に 1 回以下」と回答した割合と学歴のクロス集計の χ2 検定結果。** p<0.01, † p<0.1, n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

4.5 子どもと一緒に過ごしている時間における母親自身の情報機器やソーシャルメディア利用への態度・考え（Q22）

PSD 実態は母親にも相当程度認識されているが、母親はどのように自身のスマートフォン利用やソーシャルメディア利用を捉えているのだろうか。本節では、母親が子どもと一緒に過ごしている時間において、母親自身の情報機器やソーシャルメディア利用と PSD に対してどのような態度や考えを持っているかについて検討する。設問項目は、「こどもの前で LINE などの SNS を使うことにはためらいがある」、「手が空くと、こどもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくなってしまう」、「こどもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、こどもへの注意や関心がそれてしまう」、「こどもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる」、「こどもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい」、「公園や電車などの公共の場でこどもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、こどもに使わせたりすると、周りの人からよく思われない気がする」の全 6 項目であり、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の 4 件法で回答を求めた。

子どもの前での SNS 利用および情報機器利用へのためらいや罪悪感を感じるとした回答は、世帯年収別にみると、概して世帯年収が低いほど回答割合が低く、高いほど回答割合が上がる（表 4.5.1）。残差分析の結果においても、「公園や電車などの公共の場でこどもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、こどもに使わせたりすると、周りの人からよく思われない気がする」の項目を除いた 5 項目で、世帯年収 400 万未満の母親の回答割合が最も低かった。世帯年収が上がるほど、母親自身が子どもの目の前での情報機器およびソーシャルメディア利用、PSD へのためらいを感じているようすが伺える。

表 4.5.1 世帯年収別　子どもと一緒に過ごしている時間における情報機器やソーシャルメディア利用への態度・考え（単位：%）

		こどもの前でLINEなどのSNSを使うことにはためらいがある	手が空くと、こどもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくなってしまう	こどもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、こどもへの注意や関心がそれてしまう	こどもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる	こどもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい	公園や電車などの公共の場でこどもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、こどもに使わせたりすると、周りの人からよく思われない気がする	N
	全体	45.8	75.7	61.1	63.9	68.5	75.2	1896
世帯年収	400万未満	37.5	72.9	56.9	57.6	64.2	73.6	469
	400万-600万未満	45.1	76.9	61.5	65.0	68.9	74.4	668
	600万-800万未満	48.0	77.1	61.6	64.3	69.5	76.1	406
	800万-1000万未満	**53.2**	76.6	65.6	67.4	69.7	75.7	218
	1000万以上	**60.0**	74.1	65.2	**74.1**	**76.3**	80.7	135
	χ2値(df=4)	29.678	3.255	6.325	15.746	8.219	3.329	
	検定結果	***	n.s.	*	**	†	n.s.	

※「あてはまる」､「ややあてはまる」と回答した割合と世帯年収のクロス集計の χ2 検定結果。*** p<0.001, ** p<0.01, * p<0.05, †p<0.1,　n.s. 有意差なし。

※残差分析の結果 5%水準(両側検定)で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

同様に表 4.5.2 に示すように、学歴別の結果においても、概して学歴が低いほど回答割合が低く、学歴が高いほど子どもの前での SNS や情報機器利用、PSD へのためらいがあるようである。「手が空くと、こどもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくなってしまう」の項目においては、世帯年収及び学歴いずれも有意差は見られなかったが、世帯年収別のみ、残差分析の結果、400 万円未満の回答割合が有意に低かった。学歴別回答結果では、前述の項目を除くすべての５項目において、0.1%水準で有意差が認められた。尚、今回の分析では、子どもの年齢別および職業別において有意差はほとんど認められなかった。

表 4.5.2 学歴別　子どもと一緒に過ごしている時間における情報機器やソーシャルメディア利用への態度・考え（単位：%）

		こどもの前でLINEなどのSNSを使うことにはためらいがある	手が空くと、こどもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくなってしまう	こどもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、こどもへの注意や関心がそれてしまう	こどもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる	こどもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい	公園や電車などの公共の場でこどもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、こどもに使わせたりすると、周りの人からよく思われない気がする	N
	全体	45.9	75.8	59.7	62.5	67.9	74.3	2243
学歴	高卒以下	35.4	75.5	52.7	50.9	60.0	69.7	548
	短大および高専・専門学校卒	44.6	74.6	60.5	63.3	69.9	72.5	755
	大卒以上	**53.0**	77.0	**63.1**	**68.6**	**70.9**	**78.5**	940
	χ2値(df=2)	43.781	1.406	15.735	46.616	20.735	16.140	
	検定結果	***	n.s.	***	***	***	***	

※「あてはまる」、「ややあてはまる」と回答した割合と学歴のクロス集計の χ 2 検定結果。*** $p<0.001$, n.s. 有意差なし。
※残差分析の結果 5%水準（両側検定）で数値が太字のものは「有意に高い」赤字は「有意に低い」ことを示す。

参考文献

荒木暁子，兼松百合子，横沢せい子，荒屋敷亮子，相墨生恵，& 藤島京子．(2005)．育児ストレスショートフォームの開発に関する研究．小児保健研究，64(3)，408-416.

Blackman, A. (2015). Screen time for parents and caregivers: Parental screen distraction and parenting perceptions and beliefs (Unpublished doctoral dissertation). New York, NY: Pace University.

DW News. (2018, September 9). Play with me! Not with your phones! [Twitter post]. Retrieved from https://twitter.com/dwnews/status/1038796670702702592

Hiniker, A., Sobel, K., Suh, H., Sung, Y. C., Lee, C. P., & Kientz, J. A. (2015). Texting while parenting: How adults use mobile phones while caring for children at the playground. *In Proceedings of the 33rd annual ACM conference on human factors in computing systems* (pp. 727-736). ACM.

Kildare, C. A., & Middlemiss, W. (2017). Impact of parents mobile device use on parent-child interaction: A literature review. *Computers in Human Behavior*,

75, 579-593.

久保隅綾・橋元良明・大野志郎 (2018), 乳幼児を持つ共働き夫婦の仕事と家庭の両立と情報機器利用実態, 東京大学大学院情報学環紀要, 情報学研究・調査研究編, No.34, 245-284.

McDaniel, B. T., & Coyne, S. M. (2016). "Technoference": The interference of technology in couple relationships and implications for women's personal and relational well-being. *Psychology of Popular Media Culture*, 5(1), 85.

Radesky, J. S., Peacock-Chambers, E., Zuckerman, B., & Silverstein, M. (2016). Use of mobile technology to calm upset children: associations with social-emotional development. *JAMA pediatrics*, 170(4), 397-399.

５. 育児ストレスと ICT 利用

育児に必要な時間と労力、責任の重さ、家の中で孤立しがちな状況など、育児の際には精神的に非常に大きな負担を強いられる。そんな中、育児ストレスを解消するために、自分自身や子供に対し、スマートフォンなどの情報端末を用いてインターネット上のコンテンツを利用するといった情報行動が、時として選択される。そこで、本章においては、乳幼児を持つ母親の育児ストレスと、ICT 利用状況との関係を把握するための分析を行う[5]。育児ストレスの変数として、前章（4.3 節参照）で用いた育児ストレス尺度（6 項目の合算）を用いる。

5.1 育児ストレスと母親の生活状況

（１）育児ストレスと母親の基本属性

母親の基本属性として、母親自身の年齢（M=32.11, SD=4.45）、専業主婦（該当:1/非該当:0、M=0.62, SD=0.49）、フルタイム勤務（該当:1/非該当:0、M=0.18, SD=0.39）、育休中（該当:1/非該当:0、M=0.18, SD=0.38）、世帯収入（M=3.42, SD=1.34）[6] と、育児ストレスとの相関分析結果を表 5.1.1 に示す。

有意な関連が示されたのは年齢のみであり、年齢が高いほど育児ストレスが高かった（r =0.07**）。

表 5.1.1 育児ストレスと母親の属性との相関

	年齢	専業主婦	フルタイム	育休	世帯収入
相関係数	.07**	0.03	-.01	-.06	.04
N	2,272	2,272	2,272	776	1,896

Pearson の積率相関分析、** p<0.01

子供の属性として、子供の性別（男:1 / 女:2、M=1.50, SD=0.50）、子供の年齢（M=3.01, SD=2.00）、子供の数（1 人:1 / 2 人以上:2、M=1.57, SD=0.50）、保育施設の利用（いずれか利用:1 / 利用なし:0、M=0.65, SD=0.48）[7]と、育児ストレスとの相関分析結果を表 5.1.2 に示す。

有意な関連が示されたのは、子供の年齢（r =0.06**）、子供の数（r =0.05*）、保育施設の利用（r =0.06**）であり、子供の年齢が高く、子供の数が多いほど、保育施設は利用しているほど育児ストレスは高かった。

[5] DK・NA を除いた有効回答数で分析を行っているため、質問項目によって n 数は異なる場合がある。
[6] 専業主婦、フルタイム勤務、育休中は 2 値化した変数である。世帯収入は、200 万円未満を 1、以降 200 万円刻みで 1 づつ増加し、1400 万円以上を 8 としている。
[7] 子供の数、保育施設の利用は 2 値化した変数である。保育施設は幼稚園、保育園、認定こども園、小学校などである。

表 5.1.2　育児ストレスと子供の属性との相関

	子供の性別	子供の年齢	子供の数	保育施設利用
相関係数	-.02	.06**	.05*	.06**

N=2,272、Pearson の積率相関分析、* p<0.05, ** p<0.01

（2）育児ストレスと母親の生活時間

母親の平日 1 日の生活時間（分）[8] として、仕事の時間（M=122.25, SD=187.62)、家事の時間（M=230.42, SD=174.09)、育児の時間（M=551.82, SD=402.08)、配偶者・パートナーと顔を合わせて会話する時間（M=89.70, SD=94.59)、こどもと顔を合わせて会話する時間（M=281.80, SD=260.35)、自由時間[9]（M=128.97, SD=136.43)、こどもと一緒に過ごす時間（M=688.91, SD=466.68）と、育児ストレスとの相関分析結果を表 5.1.3 に示す。

有意な関連が示されたのは、配偶者・パートナーと顔を合わせて会話する時間（r =-0.14**)、こどもと顔を合わせて会話する時間（r = -0.60*)、自由時間（r =-0.09**）であり、配偶者・パートナーや子供と話す時間が短いほど、また自由時間が短いほど、育児ストレスは高かった。

表 5.1.3　育児ストレスと母親の生活時間の相関

	仕事の時間	家事の時間	育児の時間	配偶者・パートナーと顔を合わせて会話する時間	こどもと顔を合わせて会話する時間	自由時間	こどもと一緒に過ごす時間
相関係数	.00	.00	-.02	-.14***	-.60**	-.09***	-.03
N	2,272	2,272	2,271	2,174	2,272	2,272	2,272

Pearson の積率相関分析、** p<0.01, *** p<0.001

（3）育児ストレスと母親の心理傾向

母親の心理傾向として、対人生活満足度、抑うつ、孤独感、社交性、ソーシャルサポート、被評価意識・対人緊張（以降、「被評価意識」と呼ぶ）を用い、育児ストレスとの関連について分析を行う。心理傾向の各項目および出典、内的整合性を示すクロンバックの α 係数（N=2,272）を表 5.1.4 に示す。いずれも「とてもあてはまる」を 4 ポイント、「ややあてはまる」を 3 ポイント、「あまりあてはまらない」を 2 ポイント、「まったくあてはまらない」を 1 ポイントとする 4 件法で質問し、その後、逆転項目については得点を逆転させた。対人生活満足に関しては、各項目を単独で分析し、その他については、4 項目のポ

[8] いずれも、0 分を含む。
[9] 睡眠、仕事、勉強、家事、食事、身の回りの用事の時間を除く

イントを合算した変数を作成し、分析に用いた。各変数の平均値と標準偏差は、生活満足（M=2.76, SD=0.86）、子供関係満足（M=3.09, SD=0.79）、配偶者関係満足（M=2.80, SD=0.91）、抑うつ（M=8.83, SD=2.67）、孤独感（M=8.01, SD=2.58）、社交性（M=9.35, SD=2.65）、ソーシャルサポート（M=11.60, SD=2.97）、被評価意識（M=9.88, SD=2.79）であった。

表 5.1.4 各心理傾向の質問項目

	質問項目	出典
対人生活満足	現在の、生活に満足している	LiSat-9(Fugl-Meyer et al., 1991)[10] を参考に作成
	現在の、こどもとの関係に満足している	
	現在の、配偶者やパートナーとの関係に満足している	
抑うつ（α=.74）	気分が沈んでゆううつになることがよくある	Zung (1965) による SDS の邦訳版（福田・小林, 1973）[11] を修正・抜粋
	泣いたり、泣きたくなったりすることがよくある	
	落ち着かず、じっとしていられないことがよくある	
	自分の人生は充実している（逆転項目）	
孤独感（α=.80）	私は、まわりの人たちとうまくいっている（逆転項目）	工藤・西川(1983)[12] より抜粋
	私をよく知っている人はだれもいない	
	私には知人がいるが、気心の知れた人はいない	
	私には、頼りにできる人がだれもいない	
社交性（α=.79）	人と一緒にいるのが好きだ	Buss (1986=1991)[13] より抜粋
	人づきあいの機会があれば、喜んで参加する	
	私にとって何よりも刺激的なのは、人とのつきあいである	
	広く人づきあいができなくなったら、不幸になると思う	
ソーシャルサポート（α=.88）	あなたが落ちこんでいると、元気づけてくれる人がいる	久田・千田・箕口(1989)[14] より抜粋
	日頃からあなたの実力を評価し、認めてくれる人がいる	
	あなたが人間関係に悩んでいると知ったら、いろいろと解決方法をアドバイスしてくれる人がいる	
	あなたが不満をぶちまけたいときは、聞いてくれる人がいる	
被評価意識（α=.80）	人から何か言われないか、変な目で見られないかと気にしている	自己肯定意識尺度(平石, 1990)[15] より抜粋
	無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている	
	自分は他人よりおとっているかすぐれているかを気にしている	
	人に気をつかいすぎてつかれる	

10 Fugl-Meyer AR, Bränholm I-B, Fugl-Meyer KS (1991). Happiness and domainspecific life satisfaction in adult northern Swedes. Clin Rehabil 5:25–33.

11 福田一彦・小林重雄(1983)『日本版自己評価式抑うつ性尺度(SDS)使用手引き』三京書房.

12 工藤力・西川正之(1983)「孤独感に関する研究(Ｉ)―孤独感尺度の信頼性・妥当性の検討―」,『実験社会心理学研究』, 22(2),99-108.

13 Buss,A.H.(1986) Social Behavior and Personality, Lawrence Erlbaum Assoc Inc.（A.H.バス著・大渕憲一監訳『対人行動とパーソナリティ』,北大路書房,1991）

14 久田満・千田茂博・箕口雅博(1989)「学生用ソーシャルサポート尺度作成の試み(1)」,『日本社会心理学会第 30 回大会発表論文集』,143-144.

15 平石賢二(1990)「青年期における自己意識の発達に関する研究 ： 自己肯定性次元と自己安定性次元についての検討, 名古屋大學教育學部紀要教育心理学科, 37, 217-234.

育児ストレスと母親の心理傾向との相関分析結果を、表 5.1.5 に示す。すべての変数において有意な関連がみられ、抑うつ（r=0.52***）、孤独感（r=0.44***）、被評価意識（r=0.28***）が高いほど、また社交性（r =-0.10***）、ソーシャルサポート（r =-0.34***）、生活満足（r =-0.39***）、子供関係満足（r =-0.43***）、配偶者関係満足（r =-0.37***）が低いほど、育児ストレスは高かった。

表 5.1.5　育児ストレスと母親の心理傾向の相関

	生活満足	子供関係満足	配偶者関係満足	抑うつ	孤独感	社交性	ソーシャルサポート	被評価意識
相関係数	-.39***	-.43***	-.37***	.52***	.44***	-.10***	-.34***	.28***
N	2,272	2,272	2,174	2,272	2,272	2,272	2,272	2,272

Pearson の積率相関分析（各種満足変数は 1 項目で構成されるため、Speaman の順位相関分析を用いた）
*** p<0.001

5.2 育児ストレスと母親・子供の ICT 利用

（１）育児ストレスと母親の利用サービス

インターネット上のサービスの利用頻度として、YouTube（M=2.69, SD=1.31）、YouTube 以外の動画サイト（M=1.68, SD=1.17）、LINE（M=4.89, SD=1.12）、LINE 以外の SNS（M=3.51, SD=1.89）、ゲーム（M=2.60, SD=1.82）、ブログ・まとめサイト（M=2.81, SD=1.58）、ショッピングサイト・アプリ（M=2.91, SD=1.28）の利用頻度[16] と、育児ストレスとの相関分析結果を表 5.2.1 に示す。

有意な関連が示されたのは、YouTube（r = 0.05*）、LINE（r = -0.11***）、ゲーム（r = 0.06*）、ブログ・まとめサイト（r = 0.05*）であった。LINE についてはマイナスの相関になっているが、育児のサポートを得やすい近親者とのやり取りの頻度が、育児ストレスの軽さと関連しているものと思われる。

表 5.2.1　育児ストレスと母親のウェブサービス利用頻度の相関

	YouTube	YouTube 以外の動画サイト・アプリ	LINE	LINE 以外の SNS	ゲーム	ブログ・まとめサイト	ショッピングサイト・アプリ
相関係数	.05*	.04	-.11***	-.04	.06**	.05*	-.01

N=2,272、Pearson の積率相関分析、* p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

[16] 1 日に 10 回以上を 6 点、1 日に数回程度を 5 点、1 日に 1 回程度を 4 点、週に数回程度を 3 点、週に 1 回以下を 2 点、まったくないを 1 点として変数化した。

（２）育児ストレスと子供に見せる情報機器

子供に見せたり、使わせたりしている情報機器として、スマートフォン（M=0.62, SD=0.49)、従来型携帯電話（M=0.01, SD=0.10)、タブレット端末（M=0.24, SD=0.43)、パソコン（M=0.07, SD=0.26)、見せていない/使わせていない（M=0.28, SD=0.45）への該当有無（あり：1、なし：0）と、育児ストレスとの相関分析結果を表 5.2.2 に示す。

有意な関連が示されたのは、見せていない/使わせていない（r = -0.08**）のみで、負の相関であった。これは、育児ストレスを抱えていないことが、子供に情報機器を見せない・使わせない方針と関連する可能性を示唆している。

表 5.2.2　育児ストレスと子供に見せる情報機器の相関

	スマートフォン	携帯電話（ガラケー）	タブレット端末	パソコン	見せていない/使わせていない
相関係数	.04	−.01	.02	.01	−.08***

N=2,272、Pearson の積率相関分析、*** p<0.001

（３）育児ストレスと子供に見せるサイト・アプリ

子供に見せたり、触らせたりする情報機器でよく利用しているサイトやアプリについて、動画サイト・アプリ（M=0.84, SD=0.37)、SNS（M=0.11, SD=0.31)、ゲーム（M=0.23, SD=0.42）への該当有無[17]と、育児ストレスとの相関分析を行ったところ[18]、動画サイト・アプリ（r=0.00)、SNS（r=-0.03)、ゲーム（r=-0.03）であり、いずれの種類のコンテンツにおいても有意な関連は見られなかった。

5.3 育児ストレスと情報端末利用により生じる問題

（１）育児ストレスと母親・子供のスマートフォン依存

母親のスマートフォン依存傾向と、子供のスマートフォン依存傾向について、育児ストレスとの相関分析を行った。母親のスマートフォン依存傾向については、橋元ら（2010）[19]が Young（1998）[20]および Beard & Wolf (2001)[21] を参考に作成した日本語版 8 項目のイ

17 いずれも利用ありを 1、なしを 0 とした。動画サイト・アプリは YouTube と YouTube 以外の動画サイト・アプリのいずれかが 1 である場合に 1、SNS は LINE と LINE 以外の SNS のいずれかが 1 である場合に 1 として変数作成した。

18 いずれも N=1,644。

19 橋元，小室，小笠原，大野，天野，河井，堀川（2010）「インターネット利用と依存に関する研究」＜https://www.good-net.jp/investigation/working-group/reseach-study_category_111/2013_028-1726_473＞

20 Young, K S. (1998) Internet Addiction:The Emergence of A New Clinical Disorder. CyberPsychology and Behavior, Vol.1,No.3,237-244.

21 Beard, K., & Wolf, E.(2001)Modification in the proposed diagnostic criteria for internet addiction,Cyber Psychology and Behavior,4,377-383

ンターネット依存尺度を、<ネット>から<スマートフォン>に文言修正した尺度を用いて測定した。子供のスマートフォン依存傾向については、第三章で述べた8項目により測定した。いずれも、「あてはまる」を1点、「あてはまらない」を0点として、8項目を加算した変数を分析に用いた。相関分析の結果、母親のスマートフォン依存傾向（M=2.28, SD=1.85）と育児ストレスとの相関係数は r=0.22*** （N=2,236)、子供のスマートフォン依存傾向（M=2.31, SD=2.20）と育児ストレスとの相関係数は r=0.19*** （N=1,881）であり、いずれも有意な関連が示された。

（２）育児ストレスと子供の前でのスマートフォン使用

子供と一緒にいる場面においてのスマートフォンの利用頻度[22]と、育児ストレスとの相関分析結果を表 5.3.1 に示す。

すべての項目に有意な関連が示されており、育児ストレスの高い状態においては、子供との時間や注意を一時的に疎かにしてしまう傾向が示唆された。

表 5.3.1　育児ストレスと子供の前でのスマートフォン使用頻度の相関

	こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう	こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう	こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう	こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている	スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある
相関係数	.12***	.13***	.11***	.14***	.17***
	M=2.70 SD=1.57	M=2.48 SD=1.55	M=3.03 SD=1.57	M=2.80 SD=1.58	M=1.41 SD=.90

N=2,272、Pearson の積率相関分析、M と SD は各項目変数の平均と標準偏差
＊ p<0.05, ** p<0.01, *** p<0.001

（３）育児ストレスと子供のスマートフォン利用の悪影響

子供がスマートフォンを利用するようになってからのネガティブな変化[23] と、育児ストレスとの相関分析結果を表 5.3.2 に示す。

すべての項目に有意な関連が示されており、育児ストレスの高い状態において子供にスマートフォンを利用させることが、子供の学習や交流、健康面に悪影響を与える可能性が示唆された。ただし、育児ストレスが高いことにより子供の悪い面にフォーカスしてしまう、子供のスマートフォン利用のネガティブな側面を見ることで育児ストレスが高まっているといった関係である可能性も考えられる。

---

[22] 1日に 10 回以上を6点、1日に数回程度を5点、1日に1回程度を4点、週に数回程度を3点、週に1回以下を2点、まったくないを1点として変数化した。
[23] 各項目について、「あてはまる」を4点、「ややあてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点として変数化した。

表 5.3.2　育児ストレスと子供のスマートフォン利用の悪影響の相関

	ネットの情報に頼りきりになり自分で考えることをしなくなった	娯楽目的に利用するばかりで勉強しなくなった	見る情報が偏りがちになった	こどもの人間関係が見えにくくなった
相関係数	.07*	.11***	.06*	.13***
	M=1.38 SD=.68	M=1.43 SD=.72	M=1.76 SD=.91	M=1.27 SD=.56

	こどもとのコミュニケーションが減った	使いすぎで健康が損なわれた（視力の悪化、運動不足、肥満など）	睡眠時間の減少、昼夜逆転など生活習慣が乱れるようになった	友だちと直接交流する機会が減った	ことばの発達が遅れたように思う
相関係数	.15***	.16***	.14***	.14***	.15***
	M=1.63 SD=.79	M=1.44 SD=.70	M=1.38 SD=.68	M=1.29 SD=.55	M=1.33 SD=.58

N=1,409、Speaman の順位相関分析、M と SD は各項目変数の平均と標準偏差、* $p<0.05$, *** $p<0.001$

5.4 本章のまとめ

本章では、「私のこどもは、私が喜ぶことはほとんどしない」「私はこどもを産んでから、やりたいことがほとんどできないと感じている」といった育児ストレスと、主に情報行動との関連についての分析を行った。

育児ストレスを高める要素として、デモグラフィック属性からは、母親の年齢が高いこと（対象は 10 代～40 代）、子供の年齢が高いこと（対象は 0 歳から 6 歳）、子供の数が 2 人以上であることが有意に関連していた。また生活時間からは、自由時間が少ないこと、子供や配偶者と話す時間が少ないことが有意に関連していた。心理傾向からは、子供や配偶者との関係に満足していないこと、抑うつが高いことといったネガティブな傾向、孤独感が高く、社交性、ソーシャルサポートが低いことといった、社会的に孤立しがちな傾向、被評価意識が高く、他人と自分を比較する、よく見られようとする傾向が、育児ストレスと関連していた。母親および子供の情報機器使用と育児ストレスの関連としては、母親の YouTube、ゲーム、ブログ・まとめサイトの利用頻度が高いことと育児ストレスの高さが関連していた。育児ストレスが高い場合に、気分転換や共感を得るためにこれらのサービスの使用頻度が高まるものと思われる。また、子供に動画、SNS、ゲームを見せたり触らせたりすることと、育児ストレスとの間に関連は見られず、育児への情報機器の使用が、育児ストレスを軽減しない可能性について、今後の研究が期待される。母親と子供のスマートフォン依存傾向はいずれも育児ストレスと関連しており、育児ストレスへの対処としてスマートフォン使用頻度が増え、結果的に母親のスマートフォン依存傾向が高まり、それに応じて子供のスマートフォン使用頻度が高まるため、子供のスマートフォン依存傾向が高まる、または、親の情報機器使用への寛容性を要因として子供のスマートフォン依存

傾向が高まるという関連性が考えられる。育児の際のスマートフォン使用の問題として、育児ストレスの高い状態においては、スマートフォンを使用したいといったモチベーションが高まることで子供との時間や注意を一時的に疎かにしてしまう可能性、子供にスマートフォンを利用させることで子供の学習や交流、健康面に悪影響を与える可能性が示唆された。

母親の育児ストレスを軽減するために、しばしば育児のための動画コンテンツの使用が行われるが、乳幼児にはスクリーンタイム（テレビや情報機器を見せる時間）の制限を行うことが一般的となりつつあり、どのような場合にどのような利点があり、どのような使用状況において悪影響や問題が生じるリスクが高まるのか、より詳細な分析が、今後の研究に期待される。

単純集計表

Q1 お子さんの保育・教育状況について、普段、定期的に利用しているものはどれですか。ひとつお選びください。

		n=2,272
1.	幼稚園	30.0 %
2.	保育園	21.2 %
3.	認定こども園	4.3 %
4.	小学校	7.3 %
5.	それ以外の施設(具体的にお答えください)	2.3 %
6.	利用していない	34.9 %

Q2 あなたがお子さんに見せたり、使わせたりしている情報機器はありますか。あてはまるものをすべてお選びください。

		n=2,272
1.	スマートフォン	62.0 %
2.	携帯電話(ガラケー)	0.9 %
3.	タブレット端末(iPadなど)	23.7 %
4.	パソコン	7.4 %
5.	その他(具体的に)	2.0 %
6.	見せていない/使わせていない	27.6 %

Q3 お子さんに見せたり、触らせたりするスマートフォンやタブレット端末などの情報機器でよく利用しているサイトやアプリをすべてお選びください。

		n=1,644
1.	YouTube	82.4 %
2.	YouTube以外の動画サイト・アプリ	7.8 %
3.	LINE	10.0 %
4.	LINE以外のSNS (Facebook、Instagramなど)	1.5 %
5.	写真共有アプリ	15.5 %
6.	ゲームアプリ	23.4 %
7.	知育アプリ	23.1 %
8.	子育てサポートアプリ(鬼から電話、など)	5.8 %
9.	英語教育のための動画や音楽	7.5 %
10.	絵本や童話	5.2 %
11.	お絵かき	8.6 %
12.	その他(具体的に)	4.3 %
13.	よく利用しているサイトやアプリはない	5.3 %

Q4 お子さんは、ふだんYouTubeなどの動画サイト・アプリで、どんな動画を見ていますか。次の中から、あてはまるものをすべてお選びください。

		n=1,379
1.	キャラクター・アニメ(アンパンマン、ドラえもん、など)	68.0 %
2.	こども向け番組(いないいないばあっ!、など)	29.7 %
3.	ユーチューバー	33.5 %
4.	おもちゃの紹介	47.2 %
5.	ゲームの攻略法、実況中継	7.8 %
6.	音楽/歌手/ダンス	28.4 %
7.	お笑い	2.2 %
8.	乗り物	15.3 %
9.	動物	8.0 %
10.	スクイーズ	1.7 %
11.	ハンドスピナー	0.7 %
12.	教育・知育	10.4 %
13.	読書、絵本	4.1 %
14.	手遊び動画	10.6 %
15.	本読み動画	5.1 %
16.	あてはまるものはない	0.7 %

Q5 お子さんの情報機器やネット利用について心配していることをすべてお選びください。

		n=2,272
1.	有害サイト・アプリ（ポルノ、犯罪、暴力、自殺、家出、薬物、違法バイト、出会い系などに関するもの）の利用・閲覧	48.2 %
2.	架空請求・不当請求の被害に遭う	34.7 %
3.	自分から不用意に写真などを公開してしまう	27.2 %
4.	親の承諾なしに、オンラインショップやアプリで買い物や課金をする	33.1 %
5.	他人にプライバシー情報をさらされる	25.5 %
6.	使いすぎによる心身への悪影響	65.4 %
7.	将来的に脳の発達に及ぶ悪影響	49.8 %
8.	使いすぎによる家族間のコミュニケーションの減少	38.0 %
9.	その他（具体的に）	1.8 %
10.	特に心配していることはない	13.2 %

Q6 お子さんの情報機器やネット利用のメリットは何だと思いますか。あてはまるものをすべてお選びください。

		n=2,272
1.	英語など語学能力の向上	29.6 %
2.	プログラミング能力の向上	16.9 %
3.	ネットからさまざまな情報を得ることができる	43.8 %
4.	情報リテラシーの向上	12.9 %
5.	表現能力の向上	15.1 %
6.	子守り代わり（静かにさせる、あやす、など）	47.4 %
7.	その他（具体的に）	1.1 %
8.	メリットは特にない	14.1 %

Q7 お子さんがスマートフォンに触れるようになってから、次のような変化はありましたか。それぞれについて、該当するものをお答えください。

n=1,409

		1 あてはまる	2 ややあてはまる	3 あまりあてはまらない	4 あてはまらない	
1.	分からないことをすぐにネットで調べる習慣がついた	4.3	8.9	14.5	72.3	%
2.	ネットの情報に頼りきりになり自分で考えることをしなくなった	1.6	6.6	19.9	71.8	%
3.	学習用サイトやアプリを利用することで勉強がはかどるようになった	1.8	9.9	18.5	69.8	%
4.	娯楽目的に利用するばかりで勉強しなくなった	1.4	9.1	20.7	68.8	%
5.	様々な情報に触れることで知識が増えた	10.1	37.8	13.3	38.8	%
6.	様々な情報に触れることで視野が広がった	6.6	31.7	19.4	42.3	%
7.	見る情報が偏りがちになった	4.1	19.9	24.0	52.0	%
8.	自ら情報発信することで自己表現に積極的になった	1.8	11.2	21.4	65.6	%
9.	ネットを通じて新たな友だち関係が生まれた	0.7	2.6	13.2	83.5	%
10.	既存の友だちとの関係がさらに深まった	0.9	5.0	18.2	76.0	%
11.	こどもの人間関係が見えにくくなった	0.6	3.8	17.7	77.9	%
12.	こどもとのコミュニケーションが増えた	3.2	21.3	26.3	49.3	%
13.	こどもとのコミュニケーションが減った	1.3	15.3	28.4	55.0	%
14.	楽しそうにしていることが多くなった	7.2	39.7	19.9	33.1	%
15.	使いすぎで健康が損なわれた（視力の悪化、運動不足、肥満など）	1.5	7.5	24.1	66.9	%
16.	睡眠時間の減少、昼夜逆転など生活習慣が乱れるようになった	0.8	9.0	17.8	72.4	%
17.	友だちと直接交流する機会が増えた	0.5	5.4	20.6	73.5	%
18.	友だちと直接交流する機会が減った	0.4	3.7	20.9	75.1	%
19.	ことばの発達が促進されたように思う	6.6	27.0	18.8	47.6	%
20.	ことばの発達が遅れたように思う	0.6	4.0	23.5	72.0	%

Q8 お子さんのスマートフォンの利用について、以下のようなことはあてはまりますか。それぞれについて、お選びください。

n=1,409

		1 あてはまる	2 あてはまらない	
1.	すぐにスマートフォンを使いたがる	55.5	44.5	%
2.	やめようね、と言ってもスマートフォンをやめない	39.1	60.9	%
3.	スマートフォンを取り上げると機嫌が悪くなる	46.7	53.3	%
4.	決めた時間以上にスマートフォンをいじっていてやめられない	27.4	72.6	%
5.	スマートフォンに夢中で約束をやぶったり、食事をとらなかったりすることがある	16.7	83.3	%
6.	時間つぶしのためにスマートフォンをいじっている	24.9	75.1	%
7.	スマートフォンをしていたのに、していなかったフリをすることがある	7.5	92.5	%
8.	必要もないのに、いつまでもだらだらスマートフォンをいじっている	13.6	86.4	%

Q9 あなたのお子さんには、次のようなことがどの程度あてはまりますか。

n=1,300

		1 そうだ	2 ややそうだ	3 ややちがう	4 ちがう	
1.	誰とも遊べないでいる子を見るといっしょに遊んであげたりする	8.8	38.4	36.3	16.5	%
2.	映画やテレビなどで動物が傷ついて苦しそうにしているのを見ると、同情する	33.5	46.2	14.2	6.2	%
3.	元気のない子を見ると心配そうにしている	26.6	51.2	16.5	5.7	%
4.	友だちやきょうだいが元気がないとき、慰めたりする	36.9	45.5	13.8	3.7	%
5.	小さいこどもが泣いているとき、あやしたり慰めたりする	33.1	44.8	17.6	4.5	%

Q10 あなたが利用している情報機器にあてはまるものをすべてお選びください。

n=2,272

1.	スマートフォン	98.4	%
2.	携帯電話(ガラケー)	2.9	%
3.	タブレット端末(iPadなど)	20.8	%
4.	パソコン	41.5	%
5.	携帯ゲーム機	6.3	%
6.	据置き型ゲーム機	7.4	%
7.	音楽プレイヤー	8.1	%
8.	その他(具体的に)	0.2	%

Q11 あなたは以下の機器を使って、平日、一日あたりどのくらいインターネットをしていますか。仕事を除く、プライベート(個人)での利用について、それぞれ、およそ何時間何分くらいかをお答えください。1時間未満の場合は、「0時間、30分」のようにお答えください。

	全体平均			行為者平均		
パソコン(タブレット端末は除く)で利用する時間	24.5	分	n=2,272	66.7	分	n=836
スマートフォンで利用する時間	169.6	分	n=2,271	172.5	分	n=2,232
携帯電話(ガラケー)で利用する時間	1.2	分	n=2,272	74.0	分	n=36
タブレット端末(iPadなど)で利用する時間	10.1	分	n=2,272	54.0	分	n=425

Q12 パソコンやスマートフォン、タブレット端末などを利用したインターネット上のサービス利用頻度についてお伺いします。どの程度利用されているか、それぞれあてはまるものをお選びください。

n=2,272

		1 1日10回以上	2 1日に数回程度	3 1日に1回程度	4 週に数回程度	5 週に1回以下	6 まったくない	
1.	YoutTube	1.8	11.7	11.8	21.3	35.8	17.6	%
2.	YoutTube以外の動画サイト・アプリ	0.7	4.7	5.2	7.0	16.5	65.9	%
3.	LINE	27.4	52.2	10.5	4.7	1.8	3.4	%
4.	LINE以外のSNS (Facebook、Instagramなど)	13.1	32.2	13.2	5.5	6.5	29.5	%
5.	ゲーム	5.0	21.2	10.3	5.3	8.5	49.6	%
6.	ブログ・まとめサイト	2.3	17.9	17.2	15.8	14.6	32.3	%
7.	ショッピングサイト・アプリ	1.4	12.8	17.4	25.9	28.9	13.6	%

Q13 最近のあなたには、次のことがあてはまりますか。それぞれについて、お選びください。

n=2,236

		1 あてはまる	2 あてはまらない	
1.	もともと予定していたより長時間スマートフォンを利用してしまう	73.1	26.9	%
2.	スマートフォンを利用していない時も、スマートフォンのことを考えてしまう	20.9	79.1	%
3.	スマートフォンを利用していないと、落ち着かなくなったり、憂うつになったり、落ち込んだり、いらいらしたりする	14.9	85.1	%
4.	スマートフォンの利用時間を減らそうとしても、失敗してしまう	33.4	66.6	%
5.	ますます長時間スマートフォンを利用していないと満足できなくなっている	15.8	84.2	%
6.	落ち込んだり不安やストレスを感じたとき、逃避や気晴らしにスマートフォンを利用している	55.8	44.2	%
7.	スマートフォンの利用が原因で家族や友人との関係が悪化している	5.3	94.7	%
8.	スマートフォンを利用している時間や熱中している度合いについて、ごまかしたりウソをついたことがある	8.4	91.6	%

Q14 次の家事育児とオンラインサービスやSNSの利用について、あなたはどの程度していますか。それぞれあてはまるものをお選びください。

n=2,272

		1 よくしている	2 時々している	3 あまりしていない	4 まったくしていない	
1.	仕事や家族のスケジュールを、オンラインのスケジューラーやアプリで（Googleカレンダーなど）家族で共有する	11.6	9.9	10.5	68.1	%
2.	こどもの写真や動画を、FacebookやInstargramなどのSNSに投稿する	10.1	27.1	14.4	48.4	%
3.	誕生日や運動会など、こどもに関連したイベントをFacebookやInstargramなどのSNSに投稿する	8.3	23.1	13.5	55.1	%
4.	こどもの成長の様子をFacebookやInstargramなどのSNSに投稿する	9.3	25.5	13.3	51.8	%
5.	友人や知人などがFacebookやInstargramなどのSNSに投稿したこどもや家族の写真やイベントを閲覧する	26.6	28.3	9.9	35.2	%
6.	友人や知人の家事や子育てに関わるFacebookやInstargramなどのSNSへの投稿をみて、自分の家事育児の参考にする	15.2	27.6	17.6	39.5	%
7.	インターネットで、家事育児の情報収集をする	37.5	45.9	9.9	6.7	%
8.	SNSやYahoo!知恵袋などのインターネットの掲示板に、家事育児の悩みを相談する	4.1	8.8	14.0	73.1	%
9.	インターネットの写真共有サイトやアプリで、こどもや家族の写真を家族間で共有する	17.6	15.9	11.7	54.8	%

Q15 あなたは家事・育児に関してどのような人からどのようなサポートを受けていますか。あてはまるものをすべてお選びください。

n=2,272

		1 家事のサポート	2 育児のサポート	3 経済面でのサポート	4 相談など精神面でのサポート	5 その他のサポート（具体的に）	6 サポートを受けていない	
1.	自身の親	23.0	49.8	25.7	52.0	0.7	23.6	%
2.	自身の親族	3.8	14.2	5.9	20.4	0.3	68.2	%
3.	配偶者の親	8.3	26.7	23.3	16.0	1.3	51.5	%
4.	配偶者の親族	0.7	5.1	3.8	5.3	0.1	87.7	%
5.	友人	1.0	7.5	0.4	58.3	0.3	39.0	%
6.	隣人・近所の人	0.3	3.6	0.3	14.3	0.2	83.4	%
7.	その他の人（具体的にご回答ください）【　　】	0.6	1.3	0.5	1.5	0.4	97.1	%

Q16 あなたはお子さんの育児についての情報をどのように得ていますか。次の中からあてはまるものをすべてお選びください。

n=2,272

1.	配偶者やパートナー	51.6	%
2.	ママ友	70.5	%
3.	ママ友以外の友人・知人	33.2	%
4.	両親や親戚などの近親者	56.0	%
5.	職場の同僚や、会社や仕事に関連した友人・知人	18.0	%
6.	テレビ	47.5	%
7.	書籍・雑誌	24.1	%
8.	ネット上の記事	64.6	%
9.	ネット掲示板、SNS、Q&Aサイト	42.4	%
10.	行政や自治体の相談窓口	11.3	%
11.	保育園/幼稚園/こども園/小学校	39.3	%
12.	医師や助産師などの専門家	20.7	%
13.	その他（具体的に）	0.7	%
14.	育児についての情報は得ていない	2.0	%

Q17 あなたはふだん、お子さんと一緒に過ごす生活場面において、携帯電話やスマートフォン、タブレット端末などの情報機器をどの程度利用していますか。あなたご自身が利用している程度について、それぞれあてはまるものをお選びください。

n=2,272

		1 よく利用している	2 時々利用している	3 あまり利用していない	4 まったく利用していない	
1.	自宅での食事時間	4.5	14.3	24.0	57.2	%
2.	外食時	2.8	20.7	29.1	47.3	%
3.	電車やバスなど公共の場	10.2	34.5	23.2	32.2	%
4.	公園など外での遊びの時間	2.1	16.3	27.2	54.4	%
5.	自宅での遊びの時間	14.7	50.5	19.7	15.1	%
6.	授乳中（過去の経験も含めてお答えください）	23.5	30.8	11.7	34.0	%

Q18 あなたは育児の際、次のような時に、スマートフォンやタブレットをお子さんに見せたり使わせたりすることが、どの程度ありますか。あてはまるものをお選びください。

n=1,595

		1 かなりある	2 ややある	3 あまりない	4 まったくない	
1.	怒ったり不機嫌なお子さんをなだめたり、落ち着かせたりするため	11.1	38.4	23.1	27.4	%
2.	家で静かに過ごさせるため	10.2	40.3	20.9	28.5	%
3.	食事中のとき	2.4	8.0	15.4	74.2	%
4.	電車やバスなどの公共交通機関やレストランなどの公共の場にいるとき	9.7	41.5	18.4	30.5	%
5.	自分が家事をするときの子守代わり	12.4	37.1	18.0	32.5	%
6.	寝かしつけのとき	2.6	8.3	13.5	75.5	%

Q19 あなたはふだん、あなたのお子さんとの会話や活動中に、次の情報機器に気がそれてしまうことがどの程度ありますか。あてはまるものをお選びください。

n=2,272

		1 1日に10回以上	2 1日に数回程度	3 1日に1回程度	4 週に数回程度	5 週に1回以下	6 まったくない	
1.	スマートフォン	5.0	34.9	18.4	12.5	9.7	19.5	%
2.	携帯電話（ガラケー）	0.1	0.1	0.6	0.6	0.9	97.7	%
3.	タブレット端末（iPadなど）	0.4	1.8	1.8	2.0	1.9	92.1	%
4.	パソコン	0.3	1.6	2.2	2.9	3.2	89.8	%
5.	携帯ゲーム機	0.1	0.9	0.9	0.9	1.4	95.8	%
6.	据置き型ゲーム機	0.2	0.4	0.6	0.6	1.2	97.1	%
7.	音楽プレイヤー	0.0	0.4	0.5	0.7	1.2	97.1	%
8.	テレビ	4.3	31.3	15.6	10.9	7.0	30.9	%

Q20 日常生活場面での情報機器の利用状況についてお伺いします。あなたは、次のことについて、それぞれどの程度あてはまりますか。あてはまるものをお選びください。

n=2,272

		1 1日に10回以上	2 1日に数回程度	3 1日に1回程度	4 週に数回程度	5 週に1回以下	6 まったくない	
1.	こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう	1.1	17.6	17.5	14.1	13.3	36.4	%
2.	こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう	0.9	15.4	13.1	14.9	13.1	42.6	%
3.	こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう	1.7	23.5	17.9	16.3	14.2	26.5	%
4.	こどもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう	1.5	16.7	15.8	15.8	14.9	35.3	%
5.	こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている	1.6	20.0	15.1	15.7	15.5	32.0	%
6.	スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある	0.3	1.8	3.6	3.5	14.5	76.3	%

Q21 日常生活場面での情報機器の利用状況についてお伺いします。あなたから見て、あなたの配偶者やパートナーは、次のことについて、それぞれどの程度あてはまりますか。あてはまるものをお選びください。

n=2,174

		1 1日に10回以上	2 1日に数回程度	3 1日に1回程度	4 週に数回程度	5 週に1回以下	6 まったくない	7 わからない	
1.	こどもと一緒に食事をしているときに、スマートフォンを取り出して確認してしまう	3.4	19.8	13.9	16.1	14.2	24.8	7.7	%
2.	こどもとの顔を合わせて話しているときに、メールやメッセージを送ってしまう	2.8	19.0	12.0	16.4	14.9	24.2	10.7	%
3.	こどもと話しているときに、スマートフォンが鳴ると、取り出して確認してしまう	3.4	21.3	13.4	19.9	16.7	16.6	8.6	%
4.	こどもと話しているときに、テレビの方が気になってしまう	6.0	26.1	13.8	18.0	11.2	15.9	9.0	%
5.	こどもを遊ばせている時に、スマートフォンなどを操作して、こどもへの注意力が散漫になってしまっている	5.1	23.3	11.5	16.1	12.6	20.5	10.9	%
6.	スマートフォンなどを操作していて、こどもから目を離した隙に、こどもが怪我をしそうになったことがある	1.2	5.3	4.1	6.3	13.2	38.8	31.1	%

Q22 お子さんと一緒に過ごされているときのご自身の情報機器やソーシャルメディア利用についてお伺いします。あなたのお考えや状況にあてはまるものをお選びください。

n=2,272

		1 あてはまる	2 ややあてはまる	3 あまりあてはまらない	4 あてはまらない	
1.	こどもの前でLINEなどのSNSを使うことにはためらいがある	14.9	31.0	34.4	19.7	%
2.	手が空くと、こどもの前でもつい自分のスマートフォンを見たくなってしまう	27.1	48.7	15.2	9.1	%
3.	こどもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することで、こどもへの注意や関心がそれてしまう	13.2	46.3	29.0	11.5	%
4.	こどもの目の前でスマートフォンなどの情報機器を利用することに罪悪感を感じる	24.1	38.1	25.4	12.5	%
5.	こどもの目の前で、自分や配偶者がスマートフォンなどの情報機器を利用することは避けたい	27.0	40.7	23.4	8.8	%
6.	公園や電車などの公共の場でこどもと一緒にいるときに、情報機器を使っていたり、こどもに使わせたりすると、周りの人からよく思われない気がする	32.5	41.7	18.1	7.7	%

Q23 スマートフォンやパソコン、インターネットなどの情報通信技術（以下、ICTとします）についてお伺いします。あなた自身のことやあなたの仕事と家庭、情報機器利用の考え方などについて、ご自身のお考えにあてはまるものをお選びください。

n=2,272

		1 まったくそう思う	2 そう思う	3 どちらとも言えない	4 そう思わない	5 まったくそう思わない	
1.	ICTは仕事をより効率化してくれている	12.3	51.1	26.8	5.4	4.4	%
2.	ICTは家事や育児などをより効率化してくれている	5.9	40.3	38.9	10.1	4.8	%
3.	ICTがなければ、家事育児と仕事の両立は難しい	4.6	23.2	40.9	21.7	9.5	%
4.	ICTは私の生活のペースを加速させている	3.7	24.9	44.9	18.3	8.2	%
5.	ICTは業務量を増やしている	2.3	13.8	47.1	28.3	8.5	%
6.	ICTは私の生活の質を高めてくれる	4.3	35.0	44.8	10.3	5.5	%

Q24 次のうち、あなたが育児をする際にあてはまるものをお選びください。

n=2,272

		1 まったくそのとおり	2 そのとおり	3 どちらともいえない	4 ちがう	5 まったくちがう	
1.	私のこどもは、私が喜ぶことはほとんどしない	0.5	2.1	10.7	33.1	53.5	%
2.	私のこどもは、他のこどもより手がかかるようだ	3.6	11.8	26.1	27.9	30.7	%
3.	私のこどもは、いつも私につきまとって離れない	5.5	21.5	30.8	26.2	16.0	%
4.	私はこどもを産んでから、やりたいことがほとんどできないと感じている	7.5	23.6	32.1	23.3	13.5	%
5.	こどもを産んでから、私の周囲の人は、期待したほど援助やサポートをしてくれない	4.0	13.5	25.3	28.9	28.3	%
6.	私は以前のように物事を楽しめない	5.5	15.4	25.6	26.2	27.4	%

Q25 ご家庭でのお子さんとの接し方についてお尋ねします。それぞれの項目について、あなた自身がどのくらいの頻度でその行動を取るかを、選択肢の中から選んでお答えください。お子さんとの接し方には各家庭で様々なスタイルがあり、絶対的に正しい・間違っているという基準はありませんので、ありのままをお答えください。

n=2,272

		1 非常によくある	2 よくある	3 たまにある	4 ほとんどない	5 まったくない	
1.	こどもが遊ぶ友だちのことをよく知っている	19.1	36.0	21.5	10.6	12.9	%
2.	こどもが外で遊んでいるとき、何をしているのか把握している	28.8	37.3	18.3	6.4	9.2	%
3.	休日にはこどもをレジャー（遊園地、動物園、旅行など）に連れて行く	18.3	31.9	36.6	9.5	3.7	%
4.	こどもが何かをしてくれたときに、ありがとうと言う	56.7	30.8	8.1	2.3	2.1	%
5.	頭をなでる、抱き合う等のスキンシップをする	63.3	26.6	7.8	1.5	0.7	%
6.	こどもが何かうまくできたときには、ほめてあげる	61.3	29.6	7.3	0.9	0.9	%
7.	こどもが問題に直面していても、できるだけ本人に解決させる	13.2	35.3	35.7	11.0	4.8	%
8.	できるだけこども自身の意思を尊重する	19.4	48.1	28.2	3.1	1.2	%
9.	失敗することがわかっていても、こどものやりたいようにやらせる	16.2	36.8	36.2	8.7	2.0	%
10.	こどもの意思とは関係なく、習い事や塾に行かせている	3.6	7.7	14.2	17.5	57.1	%
11.	どの友達と遊ぶべき（遊ぶべきでない）かを、こどもに言い聞かせている	1.6	4.4	8.8	17.7	67.5	%
12.	自分の目を離れている間、こどものことが心配で仕方ない	12.5	21.6	36.1	20.0	9.9	%
13.	こどもを叱ったりほめたりする基準が、その時の気分で左右される	7.2	20.4	45.0	17.6	9.7	%
14.	個人的なイライラをこどもにぶつけてしまうときがある	8.5	18.6	44.5	17.6	10.8	%
15.	こどものペースより、自分のペースを優先する	3.7	17.6	44.7	22.6	11.5	%
16.	ちょっとしたことでも口やかましくなる	7.9	24.9	39.3	16.7	11.3	%
17.	こどもに対して、乱暴な言葉遣いになる	5.7	15.7	36.3	23.4	19.0	%
18.	こどもが悪いことをしたときには、大声で怒鳴る	7.6	22.1	38.8	17.7	13.9	%

Q26 生活に関する時間についてお伺いします。平日について、普段1日のおおよその時間をお答えください。1時間未満の場合は、「0時間、30分」のようにお答えください。

	全体平均			行為者平均		
仕事	122.3	分	n=2,272	342.1	分	n= 812
家事	230.4	分	n=2,272	230.6	分	n= 2,270
育児	551.8	分	n=2,272	553.0	分	n= 2,266
通勤	20.0	分	n=2,272	64.6	分	n= 703
配偶者・パートナーと顔を合わせて会話する時間	89.7	分	n=2,174	91.9	分	n= 2,122
こどもと顔を合わせて会話する時間	281.8	分	n=2,272	285.2	分	n= 2,245
自由時間（睡眠、仕事、勉強、家事、食事、身の回りの用事の時間を除く）	129.0	分	n=2,272	139.5	分	n= 2,101
こどもと一緒に過ごす時間	688.9	分	n=2,272	690.1	分	n= 2,268
配偶者・パートナーが、こどもと一緒に過ごす時間	134.5	分	n=2,174	142.5	分	n= 2,052

Q27 あなたには、以下のようなことが、どのくらいあてはまりますか。あなたのお気持ちに最も近いものをそれぞれお選びください。

n=2,272

		1 あてはまる	2 ややあてはまる	3 あまりあてはまらない	4 あてはまらない	
1.	気分が沈んでゆううつになることがよくある	13.8	36.1	31.7	18.4	%
2.	泣いたり、泣きたくなったりすることがよくある	10.0	28.5	36.4	25.1	%
3.	落ち着かず、じっとしていられないことがよくある	6.0	17.9	39.1	37.1	%
4.	自分の人生は充実している	17.6	50.8	24.4	7.2	%
5.	私は、まわりの人たちとうまくいっている	13.2	59.2	22.3	5.3	%
6.	私をよく知っている人はだれもいない	4.8	23.5	43.8	27.9	%
7.	私には知人がいるが、気心の知れた人はいない	6.8	19.3	42.3	31.6	%
8.	私には、頼りにできる人がだれもいない	3.4	13.0	38.4	45.2	%
9.	人と一緒にいるのが好きだ	14.4	43.1	33.5	9.0	%
10.	人づきあいの機会があれば、喜んで参加する	12.1	38.0	35.2	14.7	%
11.	私にとって何よりも刺激的なのは、人とのつきあいである	7.0	33.9	39.1	20.0	%
12.	広く人づきあいができなくなったら、不幸になると思う	3.7	20.7	44.8	30.9	%
13.	あなたが落ちこんでいると、元気づけてくれる人がいる	28.8	47.9	17.2	6.1	%
14.	日頃からあなたの実力を評価し、認めてくれる人がいる	19.2	43.7	26.3	10.8	%
15.	あなたが人間関係に悩んでいると知ったら、いろいろと解決方法をアドバイスしてくれる人がいる	21.2	45.6	23.5	9.7	%
16.	あなたが不満をぶちまけたいときは、聞いてくれる人がいる	36.3	44.3	13.5	6.0	%
17.	人から何か言われないか、変な目で見られないかと気にしている	20.4	42.1	27.1	10.4	%
18.	無理して人に合わせようとしてきゅうくつな思いをしている	8.5	29.5	45.4	16.5	%
19.	自分は他人よりおとっているかすぐれているかを気にしている	8.0	29.6	40.7	21.7	%
20.	人に気をつかいすぎてつかれる	17.7	36.8	34.6	10.9	%
21.	現在の、生活に満足している	19.3	46.2	25.6	8.9	%
22.	現在の、こどもとの関係に満足している	32.4	47.4	16.8	3.3	%
23.	現在の、配偶者やパートナーとの関係に満足している	23.2	43.8	22.8	10.2	%

Q28 あなたのご職業に最もあてはまるものを1つお選びください。

n=2,272

○	1.	会社団体役員	0.4	%
○	2.	管理職	0.4	%
○	3.	フルタイム一般職	18.4	%
○	4.	パートタイム・アルバイト	15.1	%
○	5.	自営業・自由業	1.1	%
○	6.	専業主婦	61.7	%
○	7.	学生	0.1	%
○	8.	無職	0.5	%
○	9.	その他	2.5	%

Q29 育児に関連した勤務制度や休暇制度の利用についてお伺いします。あなたのお勤めしている会社で、以下の制度がありますか。制度の有無と利用経験について、あてはまるものをお選びください。

n=776

		1 制度があり、過去に利用したことがある（現在は利用していない）	2 制度があり、現在利用している	3 制度はあるが、利用したことがない	4 制度がない	5 わからない	
1.	短時間勤務制度	11.7	27.4	27.8	17.9	15.1	%
2.	所定外労働の制限	4.9	8.5	19.8	25.4	41.4	%
3.	育児の場合に利用できるフレックスタイム制度	3.2	6.1	14.8	47.4	28.5	%
4.	始業・終業時刻の繰上げ・繰下げ	7.2	10.6	18.3	36.1	27.8	%
5.	事業所内保育施設	1.8	3.9	9.1	73.5	11.7	%
6.	育児に要する経費の援助措置	2.3	5.8	8.0	60.1	23.8	%
7.	育児休業に準ずる措置	21.6	17.8	11.5	29.9	19.2	%
8.	在宅勤務・テレワーク	2.3	4.5	9.1	65.9	18.2	%

Q30 あなたのご家庭の世帯年収を次の中からお選びください。※税を含めた総年収でお答えください。

n=2,272

1.	200万円未満	2.9	%
2.	200万円以上～400万円未満	17.8	%
3.	400万円以上～600万円未満	29.4	%
4.	600万円以上～800万円未満	17.9	%
5.	800万円以上～1，000万円未満	9.6	%
6.	1，000万円以上～1，200万円未満	3.5	%
7.	1，200万円以上～1，400万円未満	1.6	%
8.	1，400万円以上	0.8	%
9.	わからない/答えなくない	16.5	%

Q31 あなたの最終学歴を次の中からお選びください。在学中の方は、現在在学されている学校を選択してください。

n=2,272

1.	中学校卒	2.8	%
2.	高校卒	21.3	%
3.	短大卒	12.9	%
4.	高専・専門学校卒	20.4	%
5.	大学卒	39.6	%
6.	大学院卒	1.8	%
7.	わからない/答えなくない	1.3	%

注：数値は小数点第二位で四捨五入しているため、SAの合計が100.0%にならない場合がある